



八尾市跡部遺跡出土銅鐸特別公開記念

# 銅鐸講演会記録集

—最近の発掘例を中心にして  
銅鐸の謎にせまる—



本冊子は、「跡部遺跡出土銅鐸特別公開」を記念いたしまして、平成二年二月十二日に、跡部遺跡発掘調査委員会・(財)八尾市文化財調査研究会・八尾市立歴史民俗資料館が共催いたしました「銅鐸講演会」の記録集です。

一、講演会の開催にあたって	1
二、跡部遺跡の出土銅鐸	9
三、大福遺跡の出土銅鐸	25
四、名東遺跡の出土銅鐸	39
五、高塚遺跡の出土銅鐸	57
六、銅鐸とは何か？	75

## 開会挨拶

本日はお寒い中多数ご来場下さいまして、誠にありがとうございます。講演会の開会にあたり、「言」挨拶申し上げます。

さて、皆様方も新聞・テレビなどでご存じのように、財団法人八尾市文化財調査研究会では、平成元年一〇月一四日から春日町・丁目で下水道工事に伴う跡部遺跡の事前発掘調査を実施しておりましたが、調査にはいって一一日目の一〇月二四日に銅鐸が発見されました。

銅鐸は、偶然の機会に発見されることが多く、これまでに発掘調査で発見された例はひじょうに少なく、今回の例は大変貴重なものといえます。このことを重視した私どもでは、学識経験者・大阪府教育委員会・八尾市教育委員会などからなる「跡部遺跡発掘調査委員会」を設立いたしまして、より一層総合な調査に臨むこととなりました。

調査中は、各方面の方々から多大なご指導・ご鞭撻を賜り、一二月二〇日をもって無事現地調査を終えることができました。また、一一月一二日に行いました現地説明会には、市民の皆様方はもとより、市外・府外の方々、関係機関の方々などあわせて一五〇〇名を越す見学者があり、文化財への関心がきわめ

て高いことを改めて痛感いたしました。

今回、跡部遺跡と同様の条件で銅鐸を調査された西日本各地の調査担当者の方々にもお集りいただき、調査現場からの報告をお聞きする機会に恵まれましたことは、大変喜ばしいことと存じる次第であります。これを機に、私どもの研究の参考にさせていただければ幸いに存じます。

また、特別講演をいたしまして、銅鐸研究の第一人者であられる奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部長 佐原真先生をお迎えし、「銅鐸とは何か?」というテーマでお話しをおうかがいし、皆様方とともに銅鐸の謎にせまってみたいと思います。

本日は長時間の講演会となりますので、最後までご静聴をお願いいたします。以上、はなはだ簡単ではありますが、これをもちまして開会のご挨拶にかえさせていただきたく存じます。

跡部遺跡発掘調査委員会委員長  
財団法人八尾市文化財調査研究会理事長

福島 孝

「錦鉾」講演会の開催にあたつて

八尾市立歴史俗資料館館長

安  
井

良  
三



ただいまご紹介にあずかりました八尾市立歴史民俗資料館の安井でござります。本日は、この会が無事終了いたしますように、お手伝いをさせていただきます。

先ほど委員長が申しましたように、本日は銅鐸に関する報告ならびに講演会でございます。ご承知のとおり、八尾市でこのたび銅鐸が出土いたしまして、我々は調査をして参ったわけでありますが、この銅鐸がひじょうに丁重に納められていましたという事実が明らかになりましたので、できるだけ早く本日のような機会を持ちたかったわけであります。銅鐸を取上げましたのちの洗浄作業が大変でありまして、このほどようやく一次的な洗浄作業が終わったということとであります。いよいよこれからは、細かな観察であるとか、実測であるとか、あるいは科学的な処置などをを行うわけですが、その間を利用いたしまして「特別公開」を行うこととなつたわけです。そして、ようやく本日のような会を催すことができました。

講師の先生方には、遠路わざわざご参加賜りましてありがとうございます。また、ご出席の皆様方には、会場が狭く、大変ご迷惑をおかけいたしておりますが、ご了承願いたいと思います。

銅鐸の出土しました状況とか銅鐸についての詳しいお話しは、このあとそれの方からご発表いただきますので、詳しくはそれに譲らせていただきますが、私といたしましては、前座を務める意味で、銅鐸に関する考え方を二・三申し上げさせていただきます。

ご承知のとおり、銅鐸とは、弥生時代の国産の古銅器であります。お寺の釣鐘を扁平にしたような形をしています。その起源につきましては、朝鮮式の小銅鐸に求める説が、今のところ有力であります。我が国では、今日までにおよそ四五〇個ばかりの銅鐸が確認されていますが、今回のように発掘調査によつて検出されたものは、八尾市の場合で六件目であります。本日は、そのうちの四例が報告されるわけであります。

さて、「銅鐸は何に使われたのか?」という議論がありますが、これについて私は、八尾市のように単独で出土したものと、出雲の荒神谷のように数例まとまって出土したものとは、それぞれ意味が異なるものと思います。この問題についても、今後検討を加えなければなりませんが、一般的に銅鐸は農耕に関した「まつり」に使われたものと推定されておりまして、その地域内の中心的な役割を担つた集団が所有し、伝世されていったものと考えられております。

しかし、今日までに発見された銅鐸の多くは、山腹とか、山麓、あるいは丘陵部で見付かっていることを考えますと、私は必ずしも「農耕のまつり」に限定する必要はないと思います。

私は、以前、このことに関連しまして、「考古学ジャーナル」の一五〇号で「航海民の考古学」と題する仮説を発表したことがあります。詳しくはそれに譲りますが、主旨は、山腹や山麓などから発見された弥生時代の銅劍とか銅矛、あるいは銅鏡や銅鐸などは、古代の「海人の族」、とくに海の航海に携わる民が船を航行させる時に、「山だて」あるいは「山あて」に使われる「山のまつり」に使ったのではないかということです。その例は、豊後水道にあります佐田岬の速吸神社の裏山、あるいは広島の木の宗山、それから岡山の瓊杵山、また香川の金比羅山、兵庫の甲山などがありまして、それから、そのようなことを考へたわけあります。

また、銅鐸につきましては、古い時期の銅鐸には「舌」がついております。とくに淡路島などからは古いものが出てきておりますが、「舌」がついております。このことから、銅鐸とは本来音を聞くのが主であって、それがしだいに大型化して見る銅鐸へ移つていったという説があります。

一方では、弥生時代後期のある時に、なぜ銅鐸が土中に埋められ、使われなくなつたかというような問題に対してもして、色々な説がござります。たとえば、銅鐸は土の中に保管しておいて必要な時に掘り出して祀まつったとか、あるいはまじないに使つたとか、そういう色々な説が出ております。

ところで、今回のように河内の平地で、ひじょうに丁重に埋納された銅鐸を見ておりますと、銅鐸といふものももう一度考え直す必要があるんじゃないかなと、私は思つております。八尾の例につきましては、後ほど西村が報告いたしますが、その検討課題の一つに、何故に銅鐸の鍔を上下にして、つまり銅鐸を横にして、直立させた状態で埋納したのであるうかというようなことも、これから考へなればならないことと思つております。

本日発表されますものは、八尾市と同じような状態のものでありまして、皆様方もこ一緒に考えていただければ幸いかと存じております。ただし、これまでに八尾市のような状態で調査された例というのはひじょうに少ないので、今後新たに、いろんなデータを集めなければならぬと思います。

そして次には、鍔を上下にして埋納するということは、鍔がある方向を指すということになります。これはまた後ほどスライドでご覧に入れると思ひます

が、八尾市の場合は鋸が南東の方向に向いておりました。その方向は、ちょうど「<sup>ヒヨモギ</sup>」上山の方向でありまして、最初私は「上山と関連があるのでないか」と考えたのですが、正確な方向はもう少し北の方角であります。一つの仮説といったしまして、その方向は冬至の時に太陽が昇る方向ではないかと考えたわけであります。残念ながら、昨年の冬至は雨が降りまして、観測することができませんでしたが、計算上ではその方向で合っております。このことは偶然かもしれませんし、弥生時代人が意識していたか否かについても、別のことであります。その他、銅鐸の型式編年、あるいは紋様のこと、铸造技術のことなどについての色々な問題があります。それは、おそらく佐原先生からお話しがあろうかと思ひますので、ここでは省略させていただきます。

それでは、早速本番に入りたいと思います。本日は、一日ひじょうに大変なことと存じますが、ごゆっくりご静聴下さい。

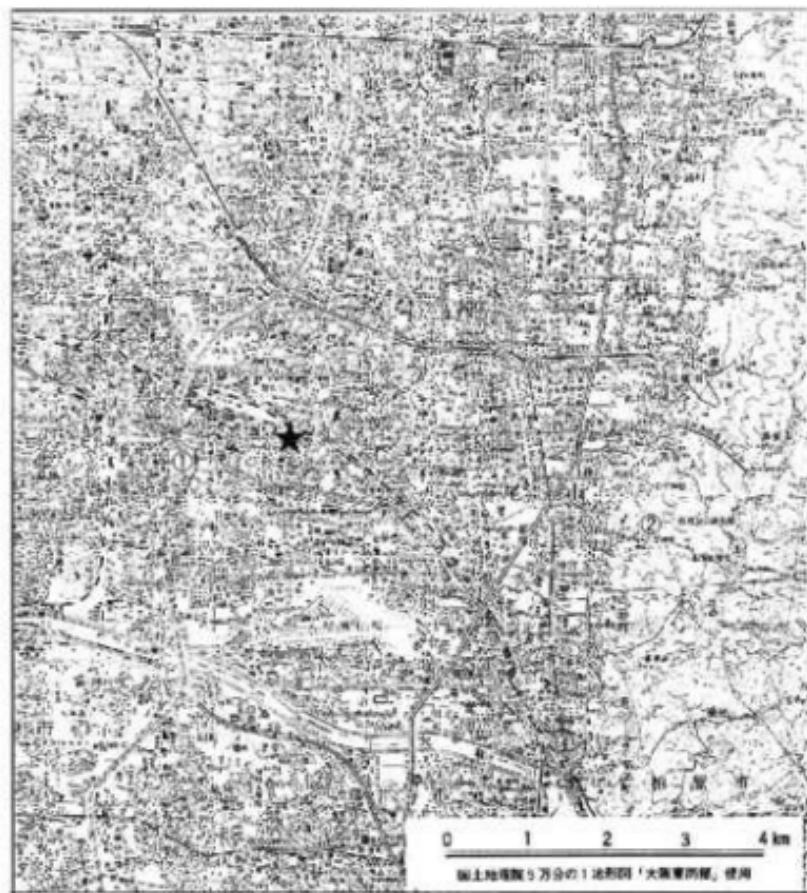
以上をもちまして、開会にあたりましての導入の役を果たさせていただきます。どうもありがとうございました。



あとべ  
跡部遺跡の出土銅鐸

財團法人八尾市文化財調査研究会

成 西 村 公  
海 佳 助  
子



② ①  
亀井遺跡  
恩智遺跡

八尾市文化財調査研究会の西村と申します。このたび、「跡部遺跡出土銅鐸特別公開記念講演会」ということで、銅鐸が出土した跡部遺跡の調査経過を、スライドを交えてお話しさせていただきます。

まず、調査地の住所は八尾市春日町一丁目四五一一で、JR大和路線八尾駅から西へ四〇〇メートルほどの所です。調査は公共下水道の竖坑建設工事に伴うもので、調査面積は約八五平方メートル、調査期間は平成元年一〇月一四日から一一月三〇日まででした。

調査地の周辺は、河内平野と呼ばれている地域で、低湿地にあたります。地図の星印が今回の調査地です。ここから約一、五キロメートル西に行つた所には、弥生時代の大きな集落である龜井遺跡というのがあります。ここからは銅鐸の破片が二点出ております。また、八尾市域の東側、生駒山の西麓にあたる恩智遺跡の裏山からは、完形品の銅鐸が二点出ています。これは、流水紋銅鐸（恩智垣内山銅鐸）と製婆禪紋銅鐸（恩智都塚山銅鐸）です。

写真1 調査地から南東の方向を見た写真です。二上山から牛駒の山なみが北へ連なっています。調査地は、河内平野のなかでも、とくに低地に位置しています。



写真 1

**写真2** 一〇月二四日、銅鐸が発見された時の写真です。この時は、銅鐸が埋められた時代の地層よりも一層上、つまり銅鐸が埋められた時代よりも新しい時代である古墳時代初めころの地層を対象に調査をしておりました。ちょうど、「土壤」と呼んでいる穴を掘つております。穴の底を作業員のおじさんにしあげてもらっていたんですが、その穴の底で銅鐸の耳が見付かったわけです。まわりを少し掘り広げてみたら、耳だけではなく、かなりの部分が残っているということがわかりました。

**写真3** 保存科学の研究者である奈良国立文化財研究所の沢田正昭先生や文化財センターの山口誠治さんに現場に来ていただいて、銅鐸の変質を防ぐための応急処置や洗浄の方法などを教えていただきました。これは、銅鐸が錆びないようにということで、銅鐸の表面にアクリル樹脂を塗っているところです。

**写真4** 銅鐸よりも上層の遺構が掘り上がった状態を、西から写した写真です。調査地の南半分は道路の下にあたっていますので、この写真には北側だけしか写っていません。手前中央に丸く窪んでいる一番大きな遺構が古墳時代前期の土壙で、その中の左端に白っぽく見えているのが銅鐸です。鉢は右上、東の方向を向いています。



写真 3



写真 2

13 跡部遺跡の出土銅鐸

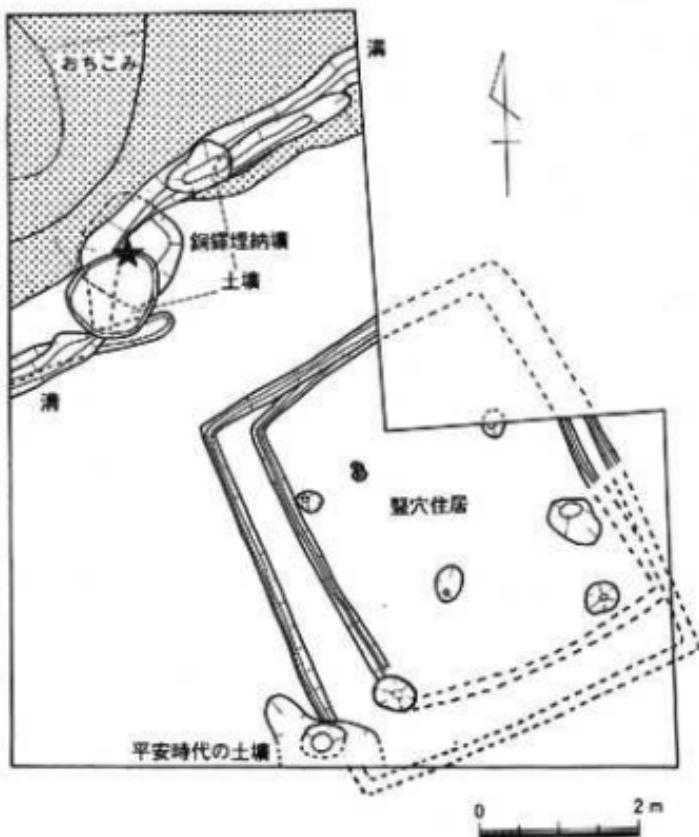


図1 調査区全体図

さきほどから申していますが、この土壤が掘り込まれている地層より下の地層に銅鐸が埋められていることがわかつていますから、上の遺構から調査を進めていきました。すると、その土壤の下、銅鐸のすぐ上に北東から南西へS字形にカーブして伸びる溝のあることがわかりました。つまり、銅鐸が埋められてから溝が掘られ、その後土壤が掘られたということです。この溝の時期は、中から出て来た土器から、弥生時代後期末と考えられます。ですから、銅鐸は弥生時代後期末には、すでに埋められていたということがわかりました。

**写真5** さきほどの古墳時代前期の土壤や弥生時代後期末の溝だとかの調査を終えて、銅鐸が埋められている地層まで掘り下げました。発掘調査では、土を削つて土の色や質の違いを見分けながら遺構の輪郭を探していくわけですが、そのようにして埋納壙<sup>まんろう</sup>を探したところ、銅鐸より一回り外側に、ベースである土とは色や質の違う土のあることがわかりました。その後調査を進めていくと、これは埋納壙の輪郭ではなく、内側の堆積土だったとわかるんですが、一月四日の時点でもらえた埋納壙です。ですから、一月一〇日の記者発表や一月一二日の現地説明会では、「埋納壙は銅鐸がスッポリ納まる程度の穴」と発表しました。



写真 5



写真 4

写真6 当初の埋納壙の横断面の写真です。銅鐸は、埋納壙の一番下に敷かれた粘土に、鱗を突き刺すように横向きに置かれています。銅鐸のすぐ外には、銅鐸に沿って赤っぽい粘土が帯状にまわっています。その外側には、両脇に二枚の青から灰色の粘土が水平に堆積していて、さらにその外に、黒っぽい粘土が立ち上がって伸びているのが見えます。この黒い粘土の一一番外側の線を埋納壙の輪郭だと思ったわけです。この「立ち上がる粘土」から、「銅鐸は木の箱に入れて埋められていたんじゃないか」と新聞に取り上げられたんですが、このことについては、今のところ検討している最中です。

この立ち上がる粘土は穴の輪郭としては不自然なほど内に傾いています。穴を掘る場合、断面はV字形やU字形になるのが自然で、穴の肩の線は上が広がるか、せいぜいまつすぐになるはずですから。そのようなことから、埋納壙はもっと大きくなるんじやないかななどと考えながら調査を進めました。ところが、土質が本当に見分けにくくて、平面的な調査では、もうそれ以上見分けることができませんでした。そこで、思い切って銅鐸を縦断・横断するようなトレンチを掘り、このトレンチの壁面を観察して、なんとか埋納壙の輪郭を見つけようとしたのですが…。

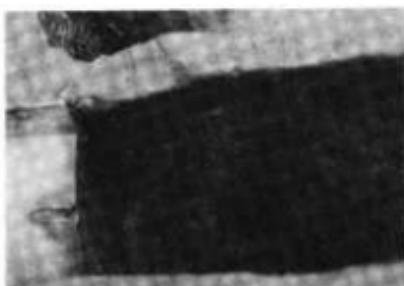


写真 7



写真 6

写真7 縦断面裾部の堆積状況です。埋納場が広がるという根拠は見いだせていませんが、鋤と櫛の外側には黒い粘土の立ち上がりがなかつたので、この土が「木箱」の痕跡だという可能性は少ないよう思います。鏃身内部に土が詰まっているのが少し見えています。

写真8 縦断面鋤の側の堆積状況です。なんとなく当初の埋納場よりも広くなりそうです。手前に大形の壺の底部が見えています。破片のために時期は決めにくいのですが、おそらく弥生時代中期以前のものと考えられます。銅鐸を埋めるべき所にすでに埋まっていた土器が、埋納場を掘り返した時にまぎれこみ、埋め戻しの時に混ざつたものと考えています。

写真9 銅鐸を取り上げているところです。いろいろな可能性を考えながら調査をし、埋納場の大きさも決着がつかないままではあつたのですが、警備や保存上の問題から、とりあえず銅鐸を取り上げて、調査を続行することになりました。なにしろ、銅鐸が見つかった一〇月二四日からこの取り上げの一月一八日まで、男子調査員總勢五名は交替で寝ずの番をしていましたから、疲れの色も見えはじめていました。他の調査員は、自分の仕事を持つていたわけですから、本当に大変な毎日だったと思います。



写真9



写真8

なお、鐸身内部の土は、人為的に詰めたものか、自然に溜まったものかが問題となつてゐるため、土ごと取り上げて後で調べることになりました。その後、そのままの形で取り出し、いろんな方法で調べましたが、どうやら人為的に詰められたもののようにです。

**写真10** 銅鐸を取り上げた後の埋納壙の底です。底の部分には流水紋がクツキリと写っています。底の部分は真赤だったので、ベンガラなどの赤色顔料が塗られているのかと思ったのですが、科学的な分析結果から、酸化第一銅だということがわかりました。

ひとまず銅鐸を取り上げた後、トレンチを掘り抜いて、あるはずの外側の穴の線を探し続けました。銅鐸発見から一月めの一月二十四日に、ようやく粘土の立ち上がりの外側に大きな輪郭が見えました。大きさは一辺一、一二五メートルほどあります。

**写真11** 埋納壙を掘りはじめたところ、肩口から銅鐸が一点出土しました。

この銅鐸は弥生時代中期末から後期にかけて作られたもので、おそらく埋納壙を埋め戻す時に偶然入り込んだものと考えられます。このことから、銅鐸が埋められた時期は、弥生時代中期末から後期よりも後だと考えます。



写真 11



写真 10

写真12 埋納壙を掘りきった写真です。ひじょうにわかりにくいかとは思いますが、十文字に掘り込んだのが埋納壙を見つけるために掘ったトレンチです。それに沿って壁のように立っているのが土の堆積を観察するためのセクションです。銅鐸の周囲に柱のように残っているのが、「立ち上がる粘土」です。先ほどの横断面写真6の一一番外側の土を残して、内側の水平に堆積している土を掘ったわけです。発掘の原則からすれば、この掘り方はまちがいです。本当は、昔の人が銅鐸を埋めた頃とは逆に掘って行かなければいけないですが、なにしろ、埋納壙の輪郭がわからなかつたのですから…。

写真13 銅鐸をもう一度埋納壙の中に据えて、埋納された時のように復元してみました。据の方から見たところです。鐸身内部に土がギッシリ詰まっているのがわかります。右手奥に銅鑄、鉢の左側に土器が見えています。

写真14 調査がすみ、埋納壙は切り取って保存しようということになります。地面から埋納壙をソックリ取り上げようとしているところです。取り上げた後は、科学的な加工が行われ、これまた科学的な保存処理を施された銅鐸を埋納当時のように納めて、ともに展示されることになります。

写真15 銅鐸が出て来てすぐに、電磁波探査をしてもらった時の写真です。



写真 13



写真 12



写真 14



写真 15



写真 16

銅鐸は、出雲の荒神谷や神戸の桜ヶ丘などのように、何個かまとめて埋まつていることもあります。跡部遺跡でもそのようなことがあれば大変ですし、調査方法なども考えなければと思ひ、電磁波探査といつて、レーダーのようなもので、ほかに銅鐸はないかを前もって探してもらいました。探査の結果、他にそれらしいものの反応はなく、ホッと一安心しました。

写真 16 花粉分析用の土のサンプルを採取しているところです。土に含まれている花粉の種類や状態、数などを調べることによつて、銅鐸が埋められた時代の自然環境などを復元することができます。

写真 17 洗浄が終わった銅鐸です。A面と呼んでい

る方です、右が上、左が下になつて埋まつていました。

「扁平鉢式一区流水紋銅鐸」と呼ばれるもので、鐸身

には流水紋が全面にあります。柄には突線に区画され

た鋸齒紋が九個があり、鋸齒紋の斜線の方向は右の四

個が右上がり、左の五個が左上がりです。鰐には耳が

左右に三個ずつあり、鋸齒紋は裾に二個、耳の間に四

個一組が二組あり、斜線の方向は主に左上がりと右上

がりが交互にあります。鉢には、外側から鋸齒紋・渦

紋・緩移紋があり、耳は左右に二個と頭頂に一個つい

ています。鉢の鋸齒紋は一五個で、斜線は鱗と同じよ

うに、主に左上がりと右上がりが交互にあります。

写真 18 妻側です。B面と呼んでいる方で、左が上、

右が下です。A面とまったく同じ紋様が描かれている

わけではありません。柄の鋸齒紋は八個で、斜線は右

の三個が左上がり、左の五個が右上がりです。耳の間



写真 18



写真 17

の鋸歯紋は三個一組で、斜線は向かって右が左上がり、左が右上がりと左右対称に描かれています。鉗の鋸歯紋も一四個でA面より数が少なく、斜線は右の八個が左上がり、左の六個が右上がりで、位置は少しづらっていますが、鱗から統いて左右対称に配されています。

**写真19 A面の鉗です。**先ほどから、両面の紋様の違いをお話していますが、鉗の綾杉紋の違いがこの銅鏃の特徴だと思います。綾杉紋は斜線を三帯組み合わせていますが、A面では一番外側の紋様帶は、舞と呼ぶ鉗の付根からは伸びず、途中から出て途中で終わる三日月形になっています。先ほどのB面の鉗と比べていただくと違いがよくわかりますが、B面の綾杉紋は、舞から舞へとグルフと統っています。

**写真20 B面鏃身中央の一番大きな補鏃（<sup>ほづ</sup><sub>い</sub>か）の跡です。**この銅鏃には、A面右側の鱗の付根やB面鏃身中央、舞のB面側に、湯まわりが悪く穴のあいたところが何箇所かあり、その部分に後から「ツギアテ」のように銅を補つてやる補鏃の跡が十箇所ほど見られます。なかでも、このB面中央の一番大きな補鏃の部分には後から流水紋が刻み込まれていますが、「流水紋」をつなぐということに銅鏃作りの意味があるのではないかと考えさせられます。

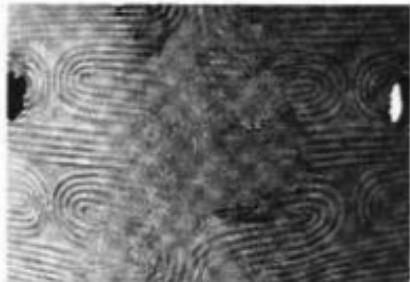


写真 20



写真 19

以上で調査現場からの報告を終わりますが、この調査でわかつたことを簡単にまとめてみたいと思います。

まず、銅鐸が埋められた時期については、埋納壇内部から出土した土器と銅鑼、下層から出土した土器や直上に掘り込まれた遺構から、弥生時代中期後半から後期後半までの間であるといえます。

埋納壇内部の埋土は、大きく分けて内側と外側とで違う種類の土が使われています。外側の上7は、ベースとなる土とほとんど見分けがつかないことから、埋納壇を掘った時に出土した土だと考えられます。内側の上のうち、埋納壇の底に敷かれている土1・銅鐸を直接覆う土2・立ち上がる土6は、周辺の土とは違うものである可能性が花粉分析の結果から指摘されています。

次に銅鐸の埋めかたですが、まず掘った穴の底に1という土を敷いて、そこへ鉛を突き刺すようにして銅鐸を据えます。そして2で鐸身を覆い、3で銅鐸を固定します。その後、4・6・7の順序についてはまだ検討中ですが、一番最後に埋められた土は5のようです。どのような順序であれ、6の「立ち上がる土」を境にして、内側は数枚の上で丁寧に埋められていることがわかります。6が鉢と裾にはないこと、鐸身を覆う土2が縦断面では鉢の端にわずか

23 跡部遺跡の出土銅鐸

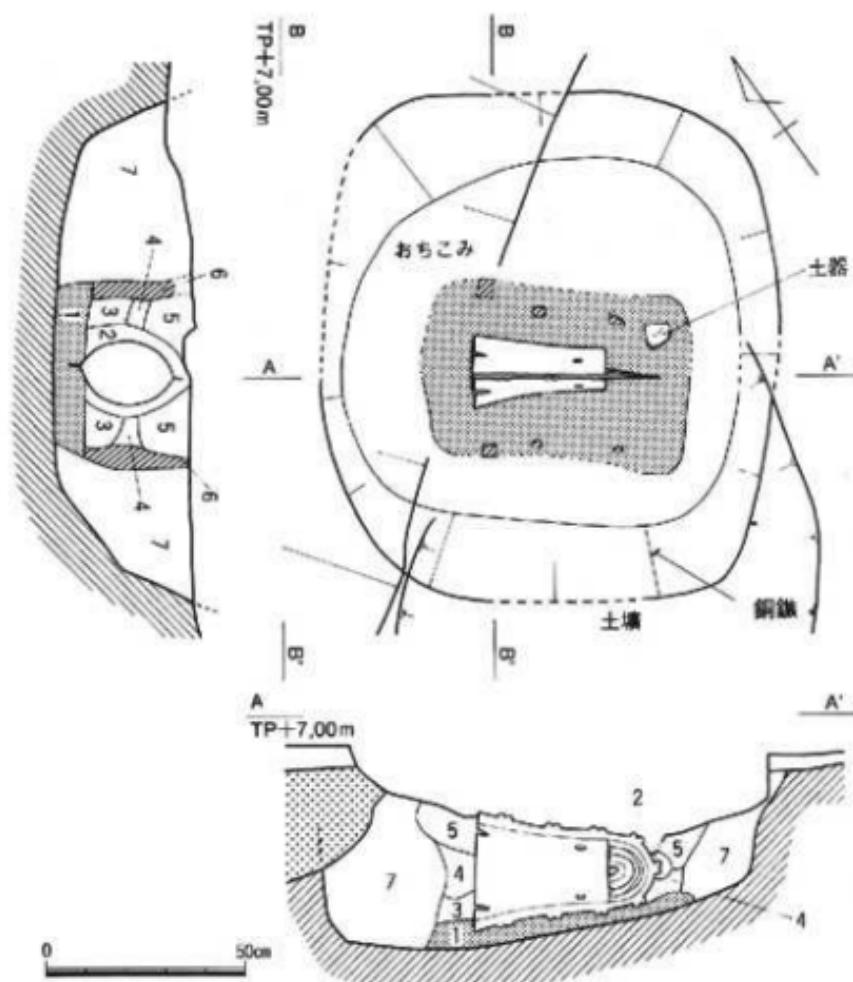


図2 銅鐸埋納塚平面図

にしか見られないこと、3~5の堆積状況が縦断面と横断面とで異なることなどから、「銅鐸埋納」についてはとくに鐸身側面を丁寧に覆うことに意味があつたような気がします。

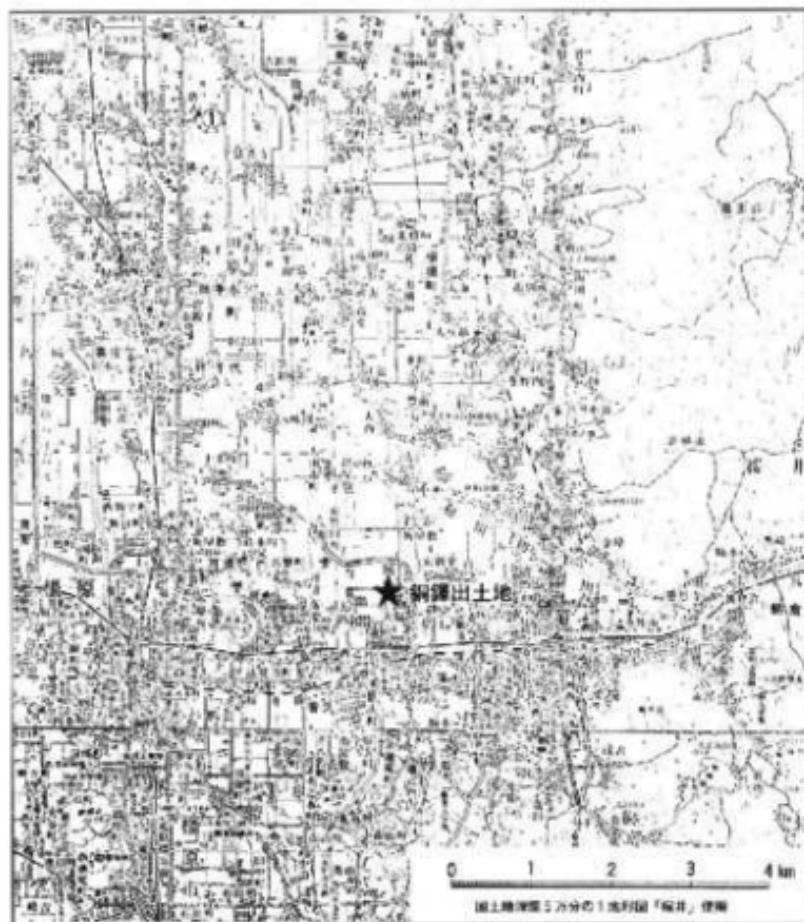
これで跡部遺跡の報告を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。この後、整理作業を進めていくうえで新たな発見もあるかもしれません、その時にも発表の機会を持てたら、と思っています。

大福遺跡の出土銅鐸

桜井市教育委員会

萩原

儀征



③ ② ①  
芝 古 遺 跡  
錦 向 遺 跡  
横 山 遺 跡

只今ご紹介にあずかりました、奈良県桜井市の教育委員会におります萩原と申します。

多分、もう皆さん知つておられると思うんですけど、今からほほ四年前の昭和六〇年に、桜井市の大福小学校建設予定地の発掘調査現場から、銅鐸が出て来ました。それより一月ほど前の夏に、島根県の荒神谷遺跡から銅鐸が六個出て来て大ニュースになつたんですが、その後大福小学校の発掘調査現場からも銅鐸が出て来まして、当時としては発掘調査中に銅鐸が出て来るということは、大変珍しいことで、ひじょうに驚きました。また、珍しいというだけではなく、他の遺構との関係から銅鐸の埋められた時期や埋納状態などがわかる銅鐸として、ひじょうに重要なものだといえます。

では、これからスライドをまじえながら、概略を説明させていただきます。まず、奈良県の平野部分の地形なんですが、大和川が南東から北西の方向へ流れています。そして南の多武峰の方から守川が流れて来て、大和川に合流しています。この流域には、弥生時代から古墳時代にかけての有名な遺跡がたくさんあります。大福遺跡の周辺では、北西に唐古遺跡、北に櫛向遺跡、北東にあたる二輪山の東西には芝遺跡などがあります。これらの遺跡からは、銅鐸形土

製品や銅鐸の鋳型、銅鐸の破片など、銅鐸に関連する物が出ています。まず、唐古遺跡からは鋳型と土製品が出ています。纏向遺跡からは耳の部分の破片が出ています。芝遺跡からは土製品が出ています。

**写真1** 調査現場の写真です。後ろに見えてる山が三輪山で、三輪山から見れば調査地は南西の方角にあたります。これは銅鐸が出て来てすぐの写真です。手前が1号方形周溝墓<sup>(ひだりがたまきまわい)</sup>で、大きさは一辺一一・五メートルくらいあります。奥が2号方形周溝墓で、こちらは一辺一四・五メートルくらいの大きさです。銅鐸は、2号墓の周溝の南西角、我々がブリッヂまたは陸橋部と呼んでいる溝の途切れる部分の近くから出て来ました。その溝の底近くに銅鐸埋納壙が掘られ、銅鐸が埋められていました。

**写真2** 2号墓は、それより古い時代である弥生時代後期の遺物包含層を削り込んで作られていますので、弥生時代の土器が何点か出土しています。先ほども申しました銅鐸埋納壙<sup>(ひづりうらなうき)</sup>は、ブリッヂの部分にあたっています。

**写真3** 銅鐸だとわかった時点で、埋納壙があるかどうか調べようということで、銅鐸に対して直交するトレンチを入れました。皆さんもご覧になつておわかりのように、ひじょうにわかりにくい土です。ただ、銅鐸の周囲が少し



写真 2



写真 1

29 大福遺跡の出土銅鐸



図1 調査区全体図



写真 3

粘土っぽいかなあというくらいの区別しかつかない状態でした。実は、銅鐸がみつかったのは偶然のようなもので、2号墓の溝の底に溜っている砂を掃除していたら、溝の隅の部分に「緑青」というんでしようか、青味がかかった土が見えてきました。そこで、何かあるんじやないかな?と思つてもう一度ジックリ見直したら、銅鐸が見つかったわけです。このような状況の中で、土の色や状態がまわりと少し違うということが、かろうじて確認できたようなわけです。

**写真4** 先ほどの状況を上から見た写真です。銅鐸は2号墓の周溝にほぼ平行して、縁部を上・下にし内側に少し傾斜した状態で置かれています。土の色の変わった部分が埋納壙ですが、銅鐸にはギリギリの大きさで掘られています。

**写真5** 埋納壙を掘り下げた状態です。埋納壙の大きさは、長径約六〇センチメートル、短径約三〇センチメートルです。埋納壙の中に石がありますが、これは意図的に埋めたんじやなく、銅鐸を埋めたときに偶然入ったものようです。銅鐸は縁の陵線をほぼ水平に保つように置かれています。意識的にそうしたのかどうかはわかりませんが、銅鐸は裾広がりですから、平坦な所に置けば紐の方が少し下がるのが普通だと思われますが…。



写真 5



写真 4

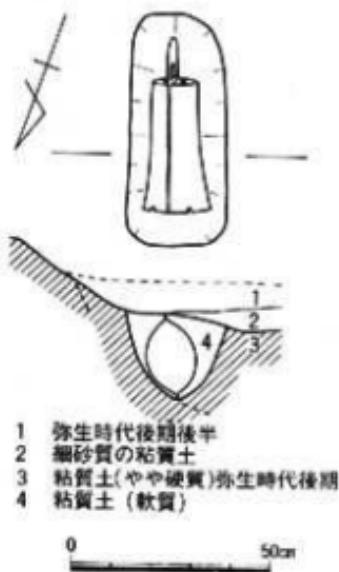


図2 銅鐸埋納壙平面断面図

写真6 埋納壙の断面と埋納状態の写真です。銅鐸に接した部分の土だけが少し軟らかいというのか、水分を含んでいるというのか、まわりの土と土の固さが少し違います。調査中は、粘土を巻いて埋めたんじゃないかと考えていましたが、今もその点は疑問に思っています。銅鐸のすぐそばと少し離れた所では、若干質の違う土が入っています。この写真と図2とでは、土層の状態が少し違っている部分がありますが、これは、「土がどのように溶つていくのか」とか、「土がどのように削られているのか」、「埋納壙はどの土から掘り込まれているのか」とか、いろいろと検討している最中のもので、最終的には図2のようになりました。



写真 6

銅鐸は、収納壙の肩に接した形で斜めに置かれていることから、この銅鐸は周溝の溝壁をある程度意識していたことがわかります。銅鐸の上には周溝の中の土がほんの少し被っていることから、銅鐸が埋められたのは、2号墓造営と、同時かその直前であり、銅鐸は2号墓を意識して埋められているということだが、この写真でおわかりになるかと思います。そう考えると、銅鐸が埋納された位置に2号墓が偶然作られたんじゃないということになります。このことは、銅鐸が埋められた時期を考えるうえで、一つの大きなポイントとなつてきます。埋納坑の外側の土には、弥生時代後期の土器が入っています。埋納壙はこの土を切つて掘られていますので、銅鐸が埋納されたのは弥生時代後期を含めてそれよりも新しいことがわかります。

写真7 銅鐸を取り上げた後の埋納壙を上から見たところです。

写真8 2号墓の周溝の断面です。周溝の中に溜っている土にはあまり変化は見られません。この周溝からは、弥生時代後期の中頃から終わりにかけての土器がわずかの量ですが出土しています。

写真9 2号墓が作られる以前に堆積した包含層から出土した弥生時代後期の土器の出土状態です。2号墓の作られた時期と銅鐸の埋納された時期が、こ



写真7



写真 8



写真 9

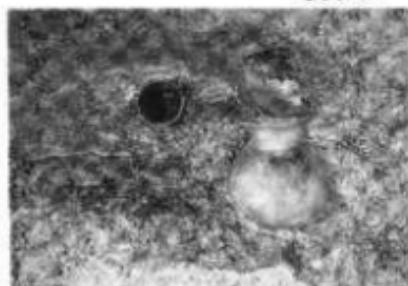


写真 10

の遺物の時期よりも新しいという一つの根拠になります。

写真 10 調査区南東の隅あたりに土壙という素掘りの穴がありますが、そこから出た弥生時代後期の土器の出土状態です。2号墓の周溝はこの土壙を切つて掘られているので、2号墓は弥生時代後期よりも新しい時代に作られたということがこの切合関係からもわかります。いくら古くても、土壙の掘られた時期よりは古くならないわけです。それを上限と言いますが、先ほどの包含層出土の土器写真9やこの土壙出土の土器などから、銅鐸の埋められた時期の上限は弥生時代後期であると言えます。

次は下限の時期が問題になります。この調査地には、もともと校舎が建つていましたが、それ以前は水田でした。大和の水田は、水田の下に暗渠を掘つていることが特徴で、その跡が方形周溝墓の上面全体に掘り込みとして残っています。ということは、水田が作られ始めたころには、方形周溝墓の上面はその上にあつたはずの盛土より新しい時期の遺物包含層とともに、耕作によつて削り取られていることから、方形周溝墓より新しい時代の遺物は出ていないのです。ですから埋納壙が作られた時期の下限は、方形周溝墓・土壙・埋納壙の三つの遺構の上下関係からしか確認できないわけです。

写真11・12 1号墓の周溝から出ている供獻土器です。

写真13 1号墓の周溝からは、古墳時代前期の初めのころの土器がたくさん出ていています。このことから、1号墓の作られた時期は、古墳時代前期の初めころと考えることができます。そうすると、2号墓がこの1号墓とひじょうに近接した位置にあることから、二つのお墓は近い時期に作られたものであるといえます。私は、1号墓と2号墓は、弥生時代後期の終わりころから古墳時代前期の初めころにかけて、相次いで築造され、銅鐸埋納壙はその間に作られたと いうふうに考えてています。

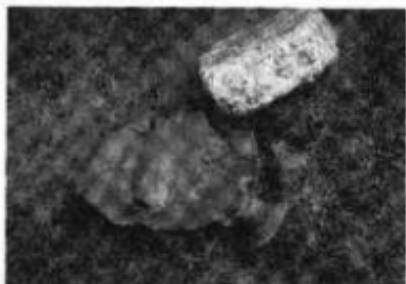


写真 12



写真 11



写真 14



写真 15

写真14 出土してから何日かたつてからの銅鋤です。銅鋤の表面には赤い部分があり、当初はベンガラが塗られているのかと思いました。分析の結果からは、酸化鉄分だということがわかりましたが、ベンガラも酸化鉄分ですし、大和の土には酸化鉄分が多く含まれていますので、これがベンガラかどうかということを決めるのは難しいのですが、見た感じでは銅鋤の表面に、何かを塗っているように見えます。

写真 15 写真14の反対側です。

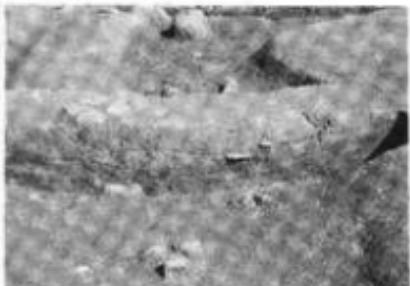


写真 13

これで大福遺跡の銅鐸の出土状況を終わりますが、この銅鐸がどこで作られたか、いつ埋められたか、なぜ埋められたかが重要な問題となつてきます。

まず、製作地についてですが、この銅鐸は、先ほどお話しした唐古遺跡から出土した銅鐸の鋳型にピッタリはまるような感じです。ところが、この唐古遺跡の鋳型は枠だけのもので、中に砂を詰めて紋様を彫り込むようなものだと考えられます。その紋様の部分がないので、「唐古の鋳型で大福の銅鐸を作った」とは言いたくないですが、その紋様の部分がないので、「唐古の鋳型におさまる」と言えるわけです。大福の銅鐸の鉢には、「重圓紋」<sup>(重ねんじゆ)</sup>という強が重なった紋様がありますが、この紋様は近江や東海に多く見られます。とくに、滋賀県野洲町からはたくさんの大福の銅鐸が出ていますが、その中には大福の銅鐸と親子ほど似ているものもあります。そうすると、唐古遺跡の鋳型に大福の銅鐸がはまるということがどんな意味を持つのかを考えるのがこれから課題だと思います。

銅鐸が埋納された時期と目的を考えるには、方形周溝墓の存在が重要な位置を占めています。方形周溝墓とは、皆さんもよくご存知のように、お墓なんですが、銅鐸はその一部に埋められています。それもお墓が外側とつながる部分、家でいうと門や玄関にあたる部分に埋められているわけです。これまで、銅鐸

は個人所有の物ではなく、村・共同体の所有物だと言わっていましたが、個人または小グループの所有する墓の入口近くに埋められているということが、大きな問題だと思います。そしてそのことが、銅鐸がどのようなことに使われていたか、なぜ埋められたかという問題につながっていくと思います。あくまでも推測ですが、墓に銅鐸が埋められるということは、葬られた人が銅鐸の祭りに携わっていた人のなのかもしれません。

銅鐸が埋められた時期については、一つの方形周溝墓の時期から、弥生時代後期の中頃から古墳時代前期の始めころの間だといえます。三つの遺構の築造の順番は、1号方形周溝墓、2号方形周溝墓、銅鐸埋納塚と考えられます。

この時期である弥生時代後期から古墳時代前期初頭というのは、人福遺跡の北約二キロメートルの所にある縄向遺跡が誕生する時期にあたります。その縄向遺跡からは、昭和四六年ごろに、「つぶされた」という意識は全然なくて、自然河道か見つかったその当時は、「つぶされた」という意識は全然なくて、自然河道から出てきたこともあって、「どこか上流の方にあつた銅鐸が壊れて流れで来たんだろう」と考えられていました。といいますのは、そのころは銅鐸が埋納されたり、破碎されたりというようなことは類例がなく、「どうせ流れて来たら

だらう」というのが一般的でした。

纏向遺跡というのは、古墳時代の前期初頭の時期から古墳時代の四世紀から五世紀の初めくらいまで続く遺跡です。その遺跡から「破碎された銅鐸」が出てくるということが銅鐸の埋納との関連を考える上で、重要な問題点になると思われます。この纏向遺跡の例と大福遺跡の例を関連させて考えた場合、「廃棄」とでもいうんでしょうか、埋められた理由の一つが、その辺から考えられることが出来るんじやないかと思います。

以上で大福遺跡の出土銅鐸について、また、発掘調査に携わった者として感じたことなどについての発表を終わらせていただきたいと思います。

どうもありがとうございました。

名東遺跡の出土銅鐸

徳島市教育委員会

勝  
浦

康  
守



- ① 鮎喰遺跡
- ② 南庄遺跡
- ③ 大浦遺跡
- ④ 庄遺跡
- ⑤ 矢野遺跡
- ⑥ 美田銅鐸出土地
- ⑦ 源田遺跡
- ⑧ 安都真銅鐸出土地
- ⑨ 高川原遺跡

本日お話をいたしましては、昭和六二年に徳島市名東遺跡において発見されました銅鐸についてです。

徳島県内においては、昭和三四年に徳島市安都真<sup>あづま</sup>という所で銅鐸が四個発見されて以来一八年ぶり、徳島県下では四一個日の銅鐸ということになります。もちろん発掘調査で出土したというのも徳島県下では初めてですし、島根県の荒神谷遺跡、そして先ほど奈良県桜井市の萩原さんから報告がありました。大福遺跡に次いで、元位置で捉えられた銅鐸として、当時、全国で三例目といふことになっています。最初に報告された八尾市の跡部遺跡はもちろん、私の方で報告して下さいます岡山県の高塚遺跡であるとか、あるいは愛知県の朝日遺跡であるとか、ごく最近は静岡県の方でまた銅鐸が出ているというような話も聞いておりまして、最近、銅鐸に関する調査報告例が増えております。

銅鐸は、図1上段のような十<sup>と</sup>塙<sup>こう</sup>から出土しております。十塙の平面の形状は、ひじょうにいびつな長方形でありまして、長辺が約六〇センチメートル、短辺が約三〇センチメートル、そして、図1下段を見ていただくとわかつていただけると思うんですが、深さは一・五センチメートルあります。埋納塙<sup>まいのうこう</sup>の北東の隅は、後世の柱穴によって壊されています。

続きまして、図1下段は断面図ですが、埋納壙内部の埋土は大きく1～5に分けております。ただし、2～4という土につきましては、おそらく埋納壙を掘削した時に出た排土を再び埋納時に利用しているものと思われまして、私自身これは細分する必要も無く、本来一つのものと考えております。大きく考えれば、1と2～4を一つにまとめた上、そして一番下にある5という土、その三つの土によって埋納壙の埋め戻しが行われていると考えています。

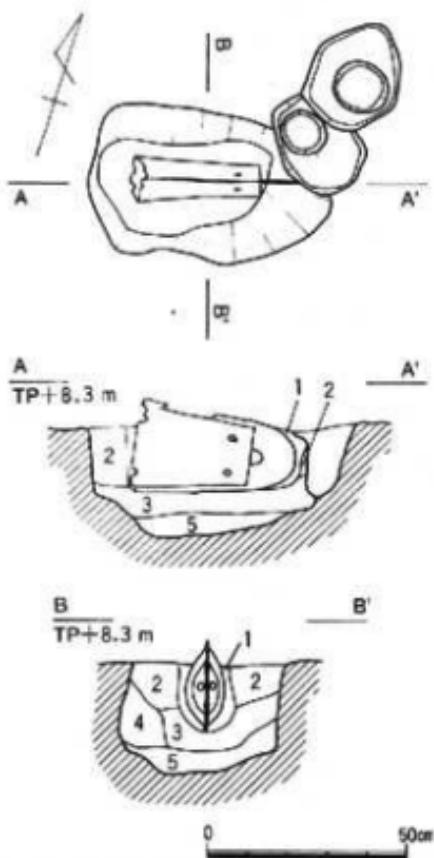


図1 銅鐸埋納壙平面断面図

名東遺跡の場合、ひじょうに特異なことなんですけれど、埋納壙の掘削が行われまして、そのすぐ後に銅鐸を埋めるというのではなく、まず底部に五センチメートルくらいの厚さで5という十が敷かれます。それから、先ほど中しましたように、埋納壙を掘った時に出た土2~4で埋め戻します。その時に、この埋納壙の中央部に、銅鐸1個を垂直に寝かせて置き、銅鐸がスッポリ入るだけの空間を残して埋め戻しが行われます。そして、その後初めて銅鐸が置かれます。さらに、最終的に1という十を埋め戻すことによつて、銅鐸の埋納が完了します。

この埋納壙の埋土の中からは、小さな土器片が何点か出ておりますけれども、時期については不明です。それからあと一つ、すべての埋土に炭が混じっています。おそらく、銅鐸を埋納する「おまつり」の時に混じったものではないかと思いますが、その「おまつり」がどのような形態のものなのか、炭がどのような意味を持っているのか、というようなことまではわかりかねます。

図2 銅鐸埋納壙と方形周溝墓群の位置関係を示しています。銅鐸埋納壙は、このように墓地の一画に作られています。

図3 2号方形周溝墓の出土遺物です。

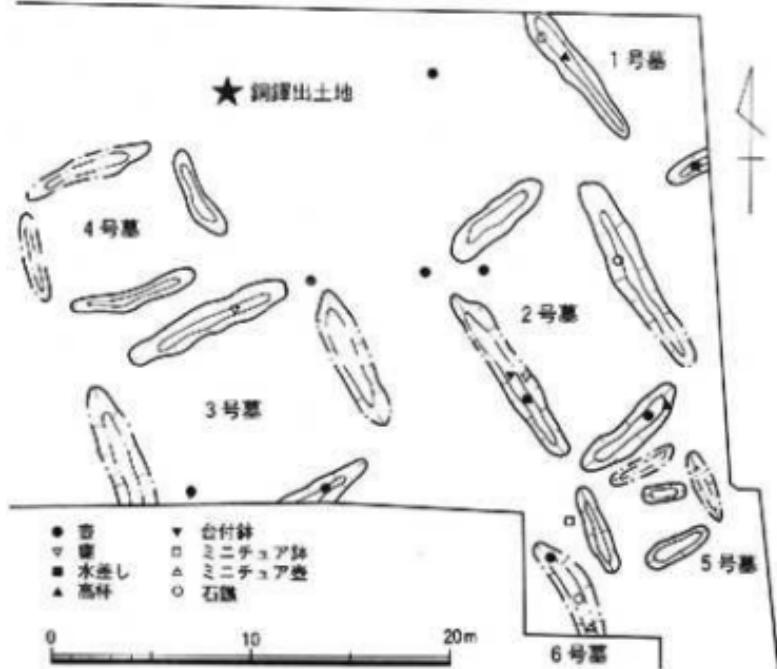


図2 調査区全体図



図3 2号方形周溝墓出土遺物

徳島市といつても、皆さんあまりご存じじゃないと思うんですが、四国三郎吉野川が、市域を南北に分断する形で東西に流れています。その吉野川の最下流域に、全長約四五キロメートルの鮎喰川（鮎を喰う川と書いてあくいがわと読みます）が山間部から平野部に広がって来て、吉野川の最下流域に流れ込みます。現在の鮎喰川はこういう川筋なんですが、これは蜂須賀家政が天正年間に付け替えた工事を行っておりまして、それ以後の川筋です。

本日のお話しの対象となつております弥生時代におきましては、おそらくこの地域一帯に大小様々な河川が無数に流れていたことだと思います。そのような河川が形成した小高い微高地上に集落が作られているということです。現在の徳島市名東町という行政区画全域に対して「名東遺跡」という名前が与えられておりますけれども、まだまだよくわかっていない部分がありまして、遺跡の様相に関しては私どもも把握しきれていない状況です。

写真1 名東遺跡の南の山から遺跡の全景を写した写真です。鮎喰川、吉野川が流れています。このあたり一帯を名東遺跡と呼んでおります。今回の銅鐸が発見された経緯は、天理教国名大教会の神殿建替えに伴う事前発掘調査によるものです。



写真1

写真 2 調査地における基本層序です。一番上には現在の盛土があります。

調査地のほとんどは現代水田耕土層から始まっておりまして、その下に一枚、中世から近世にかけての遺物包含層が堆積しております。その下の黒っぽい土からは土器が出てこないので、いつごろの時期のもののかはよくわからないんですが、このように三層が堆積しております。その下に黄色味をおびた土がありますが、これが遺構面となります。この上面で、縄文時代晚期から江戸時代に至るまでの遺構が拾えます。ただし、上から三枚目の黒っぽい土ですが、この土はここでは残っていたんすけれども、高い所では中世以降にすべて削平されております。基本的には、上から現代水田耕土がありまして、その下に弥生時代から中世・近世まで全部拾える遺物包含層がありまして、黄色い土である遺構面があるという状況です。現代水田耕土のトッブの標高は約八、四メートル、遺構面が八メートル前後です。名東遺跡の中でも、この調査地は最も高所に位置します。

写真 3 銅鐸の出土したところです。本来でしたら鋸の部分で遺構を捉えることができるはずなんですが、後世の削平のために遺構面が汚れているためにその判別がしにくくて、表面を少し掘り下げて調査をしておりましたら、偶然



写真 3

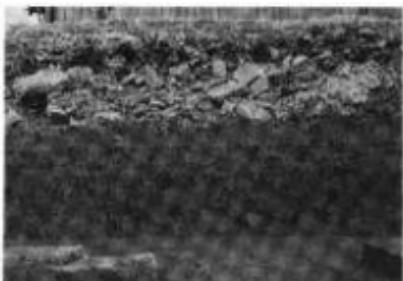


写真 2

このような形で銅鐸が出てきたわけです。ただ、私は今、本来の遺構面で調査を行っていたとしたら、この銅鐸は見付からずじまいに終わってたんじゃないかな?と思っています。埋納壙の検出については、遺構のベースとなる土と、埋納壙内部の埋土はどちらも同じような黄色い土で、ひじょうにわかりにくいました。ただ、同じ黄色でも、埋納壙埋土の方は若干明る味をおびた黄色というんでしようか、わずかに違うかな?という感じです。埋納壙の北東部に、中世の柱穴の跡が二つあります。

**写真4** 調査が始まっているなり銅鐸が出てきまして、この時点ではほかにどのような遺構があるのか、まったくわからない状態でした。調査地が、背後に山を控えたまったくの平地である状況を写しています。

**写真5** セクションを残して埋納壙を掘りました。土がひじょうにわかりにくかったので、最初からトレーナーを抜いて、埋納壙の輪郭を先に確認しました。

**写真6** 断面の写真です。一番下の5と呼んでいる土だけが異質の土で、2~4に関しましては、おそらく、埋納壙を掘った時の土を使って埋め戻しているんだと思います。そして、一番最後に銅鐸を置いて1をかぶせていました。

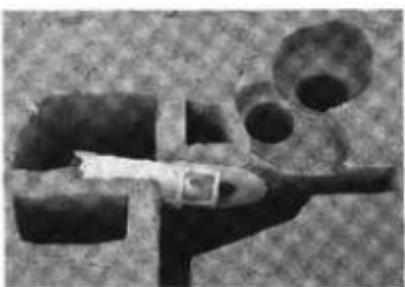


写真 5



写真 4

包含層を掘削している時に、ツルハシが当たってとばしてしまった部分です。

**写真 8** 先ほどの反対側から見た写真です。跡部の銅鐸のようにしつかりとは残つておりますんで、裾部はほとんどボロボロの状態です。

**写真 9** 舞の方から見た写真です。ほとんど垂直に立っています。

**写真 10** 据の方からの写真ですが、先ほどから問題になつております鎌身内部の土なんですけれども、名東遺跡の場合もこのようにギッシリと詰まつております。銅鐸の残りがあまりにも悪すぎたので、土の取り除き作業は私どもの



写真 6



写真 7



写真 8

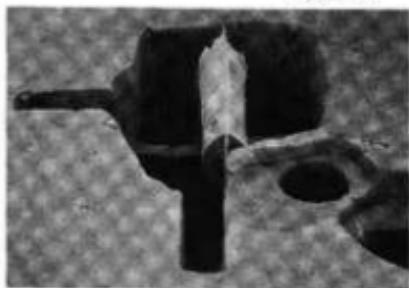


写真 9



写真 10



写真 11

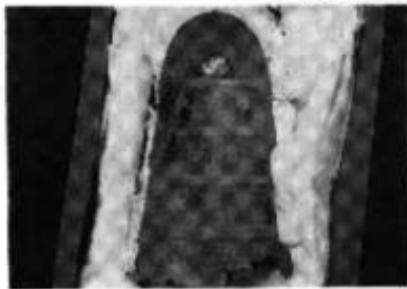


写真 12

手に負えないということで、この状態のまま奈良国立文化財研究所へ持込みました。奈文研では、土取り作業だけではなく、自然に流れ込んだ土なのが人為的に詰め込まれた土なのかを観察するために、断面剥ぎ取りまでしていただきました。この土の問題については、作業をして下ださった方にもよくわからないうらしいのですが、「おそらく流れこんだのではないか」ということです。

写真11 真上から見た状態です。銅鐸は埋納場の底からかなり浮いています。  
写真12 取上げたばかりの銅鐸です。

写真 13 先ほどスライドで見ていただきましたように、銅鐸の出たのが調査

開始後間もない時期だったので、周辺にどのようなものがあるのかよくわかりませんでした。また、調査を進めていく過程でも、弥生時代の遺構らしいものがまったく出さずに終わりそうになってしまいました。銅鐸が出た時から、いろんな人から「周辺には必ず気を付けて掘れ」と言わっていましたし、自分自身でもどうしても気にいらない所がありましたので、調査区全面にトレーンチを入れましたところ、弥生時代中期後半の方形周溝墓が六基ひっかかりました。この方形周溝墓も周溝内埋土がひじょうにわかりにくく、トレーンチをいっぱいあけてみて、初めて平面的な輪郭がわかるということで、とてもじやないけれども、本来の遺構面で捉えられるようなものではありませんでした。

これは2号墓と呼んでいるもので、六基の中では一番完璧に捉えたものです。四本の溝によって区画されておりまして、長辺が一一メートル、短辺が六メートル、周溝の幅が一ー、五メートル、深さが〇、八ー、メートルあります。方形周溝墓群という墓域の検出例は徳島市では初めてであります。

墓の形態につきましては、こちらの畿内、いわゆる揖河泉でしたら溝がグルツとまわってしまうのが多いかと思うんですけども、名東遺跡はどういった

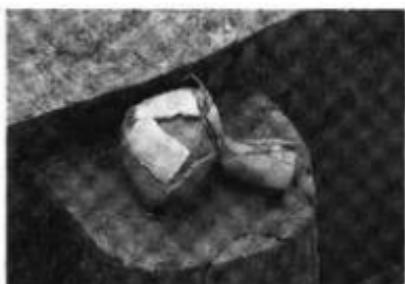


写真 14



写真 13

わけか四隅があいてしまっています。播磨の八幡道跡や川島道跡なんかでもこういう例がありますので、その当時は徳島でもこのような墓が普遍的な形態になるんじゃないかなと思つていたんです。実は昨年、私は同じ名東遺跡で方形周溝墓を七基掘つたんですけども、その調査中、周溝の四隅は本来途切れずに続くんじやないかなと私自身思うようなことがありました。

これらの墓は、地形的に高い所に位置していますので、後世にマウンドや周溝の埋土が削り取られたりしています。それで自然と四隅が途切れるような感じで掘り上がつただけで、造営当時は溝がグルフとまわっていたんじゃないかなと最近では思っています。しかし、やはりコーナー部で溝の底部がグツと上がるような感じで、不完全ながらも陸橋部のようなものを作るんじゃないかなと思っています。

写真14 2号墓の南周溝から出ている壺です。溝の底の部分ではなく、底から浮き上がつた状態で出ています。

写真15 2号墓の西周溝から出ている水差し形土器です。



写真 16

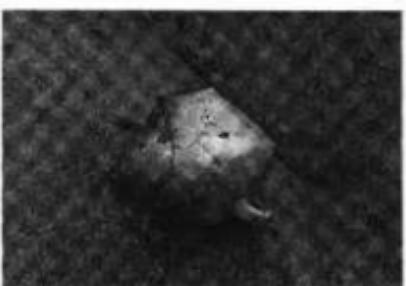


写真 15

写真16 これも2号墓の西周溝から出ている台付きの鉢です。中に土が詰まっていますけれど、底部穿孔土器です。これの下、ほとんど溝の底からだけ

れど、発<sup>あつ</sup>が一点出土しています。一つ一つ細かく見ていくとおそらく時期差も出てくるかとは思うんですが、畿内の編年で言いましたら、おそらく第Ⅳ様式から第Ⅳ様式くらいまでのものだけで、第Ⅴ様式のものは入っていません。

写真17 2号墓の陸橋部分なんですけれども、完形の土器が出ていているところです。土器を埋納した穴の掘り形はわずかに認められる程度です。本来の遺構面はもう少し上方なんですが、土がひじょうにわかりにくいため、偶然あけたトレンチで、土器が見つかりました。



写真 18

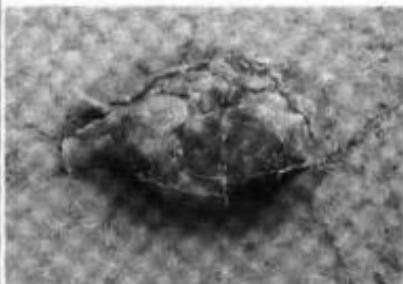


写真 17

写真18 土がついたままの銅鐸の写真です。今私の方では概報を作っているところなんですが、保存処理が終わってから写真をまだ撮れなくて、このような汚い写真で申し訳ないです。銅鐸の計測値は表に載せてますが、全長は二九、三センチメートルあります。佐原先生の分類によります、「扁平鉢式六区裝<sup>あわせ</sup>装<sup>はり</sup>紋」銅鐸です。

銅の紋様構成はちょっと見にくいのですが、まず一番外側に突線のような線があります。次に外から内に向かって複線の鋸歯紋、突線がありまして複線鋸歯紋、突線がありまして縫杉紋帶、次に一本の突線、無紋帶、さらに一本の突線があります。複線鋸歯紋の方向ですけれども、左上がりの右下がりがほとんどですが、一部に右上がりの左下がりと逆転するところがあります。

この銅鐸の特徴的なところは、鐸身表面の区画面を、磨くというのかまたは削るというのか、そういった感じで窪ませてあるところです。厚さも一ミリメートルに満たない箇所があります。そして、帯の部分を区画面からひじょうに突出させた状態にしてあるということです。奈良県にある元興寺文化財研究所の内田さんという方は、「おそらく、銅鐸が鋳上がったと同時に、加工を加えているんじゃないかな」とおっしゃっていました。あと一つ特徴的なことは、



写真 19



写真 20



写真 21

裾の部分に下辺横帶があるんですけれども、それまで全部削りとばしているという状態です。そのほかではわかりにくいですが、三対の飾耳が残っています。写真19 錘の部分の写真です。先ほど、こちらの資料館にある「恩智都塚山の銅鐸」を見せていただいたんですが、「名東遺跡の銅鐸」にひじょうに似ていますが、同じ鋳型でつくられたものではないと思います。

写真20 捩のアップです。

写真21 徳島市で、毎年秋に「埋蔵文化財資料展」というのをやっているんですが、その時に展示した銅鐸の写真です。保存処理を終えて、徳島へ帰ってきた時の状態です。

名東遺跡の銅鐸も、先ほど報告された大福遺跡の銅鐸と同じように、墓と関係があります。ただ問題になるのは、墓が先か銅鐸が先かということなんです。方形周溝墓と銅鐸埋納墳は、どちらも同じ遺構面から検出したものであって、いわゆる「層位学」から実証できるものではありません。そのうえ、遺構どうしの切り合い関係もないということで、どちらが先か後かということは、おそらく永久の謎になるのではないかと思つてゐるんですけども…。

いずれにしましても、従来「銅鐸」というものは住居やお墓なんかには絶対に埋められないもんだ」というふうに口われてきましたが、先ほどの大福遺跡であれ、次にお話していただく岡山の高塚遺跡あれ、実際ドンドン新しい事実がこのようになってくると、最近そういう考え方をするのはもう古いんじやないかなと思つています。

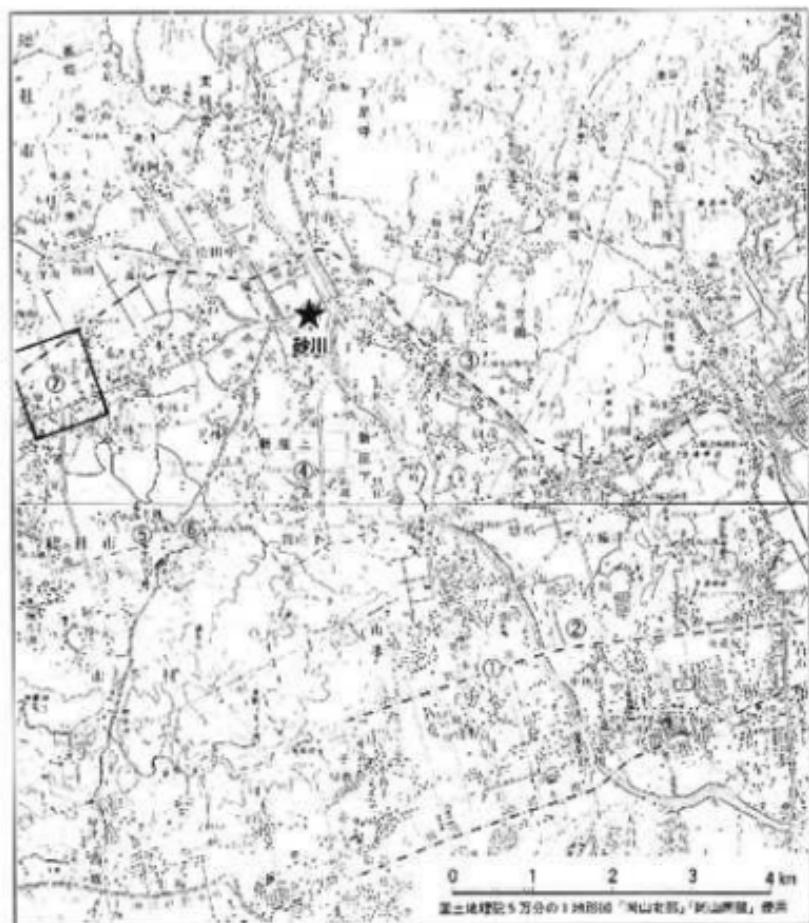
先ほどちょっとお話を聞いたんですが、高塚遺跡の場合、住居址のすぐ近くから出ているということです。住居址の近くということは、だからもう、集落の中でもすぐそばに人が住んでるような所に銅鐸が埋められているということになります。そのようにお聞きしますと、銅鐸のまつり白体も変わってきてるようと思えまして、「神秘的な銅鐸」というよりも、むしろ「人の生活の匂いのする銅鐸」というものではないかと感じております。

以上、簡単ですけれども、名東遺跡の銅鐸について報告を終わりたいと思います。

たかつか  
高塚遺跡の出土銅鐸

岡山県古代古備文化財センター

小松原基弘



- ① 上東遺跡
- ② 川入遺跡
- ③ 倭中高松城
- ④ 造山古墳
- ⑤ 倭中國分尼寺跡
- ⑥ 倭中國分尼寺跡
- ⑦ 倭中國府推定地

岡山から参りました小松原と申します。よろしくお願ひします。

岡山市の高塚遺跡から、平成元年の八月に、銅鐸が出土しました。高塚遺跡といいますのは、岡山県南部の岡山平野にあります。その岡山平野の北西部に足守川という川が流れています。岡山といえば桃太郎ですけれども、その桃太郎さんの人ついた桃が、ドンブラコ・ドンブラコと流れて来たのが足守川だといわれています。この足守川の流域というのは、弥生時代の遺跡がひじょうに多い所で、下流の方には、弥生時代後期の標式遺跡となっている上東遺跡や川入遺跡などがあります。高塚遺跡も足守川流域にあるんですが、それらの遺跡の上流になります。

地図の星印が銅鐸出土地点ですが、ここが高塚遺跡の場所になります。その右側、つまり東側を流れているのが足守川です。左側に砂川と書いてあります。が、この砂川は西の方から流れ来て、足守川に合流します。つまり、高塚遺跡は、この合流点の北方に位置するわけです。

高塚遺跡の周辺を見てみると、東に高松（備中高松）がありますが、ここは天正一〇年（西暦一五八二年）に豊臣秀吉に水ぜめにされた、清水宗治守る高松城のある、あの高松です。南の方には庚申山がありますが、ここは、やは

り水ぜめの時に毛利軍の吉川元春が陣を敷いた山です。そのまた南の方には、全国で今長第四位の造山古墳があります。また、西方には備中國府の推定地のある総社市があります。

高塚遺跡というのは従来知られていた遺跡ではなく、山陽自動車道が岡山を通るんですが、その自動車道が通る道筋にあたる場所なので、事前に確認調査をして、遺跡だとわかった所です。確認調査というのは、「坪掘り」といいまして、少ない面積を掘って遺跡があるかないかの確認をする調査です。その調査の結果、遺跡があるということで、平成元年四月から本格的な調査に入ったわけです。

#### 続いて、銅鐸発見の経緯についてお話しします。

先ほども言いましたが、今回の調査地は道路の路線に合わせた場所で、自動車が走る道路というものは細長いものですから、調査する範囲も自然と細長くなります。銅鐸が出た所は、高塚遺跡の真中にあたり、字名を「フロヤ」と言います。そこを、私・小松原を含む二人が担当し、調査をしておりました。調査区の名前は、「フロヤ調査区1区」といいます。この調査区に、「側溝」を入れていた時に、銅鐸が発見されました。

「側溝」といいますのは、調査の最初に、調査区の四方に掘る細い溝のことです。これは、雨が降って調査区に水がたまつたりすると困るんで、まず、排水のために掘ります。それから、溝を掘ることによって壁がずーっと縦に見えるわけですから、上から順に「これが江戸時代のたんぼじやなあ、これが室町時代の地面じやなあ、これが古墳時代の地面じやなあ……」というふうに確認するためには、側溝を掘つて行くわけです。

ここで側溝を掘つていたのが八月二五日ですか、確か金曜日だったと思います。普通は二人でパーティーを組んで仕事をするんですが、その日はほかの二人が夏休みをとつてまして、私一人だったんですね。それで、作業員のおじさんが側溝を掘つてもらつていたんです。そうしたらおじさんが「何か青いものが出てたでー」と言うので行つてみると、青いのは青かつたんで青銅器だとわかつたんですが……。

だいたい、側溝を掘るには、スコップで掘つてジョレンで底を整えていくわけなんですが、その時には銅鋤の鍔の一部が側溝の底に見えていて、ジョレンでひつかかれて、耳の所が折られてしまつていたんです。断面がキンキラキンでした。

これはもう驚いてしまって、私一人ではどうしようもなくって、すぐに係長と課長に来ていただけ、「さあどうしよう」ということになりました。一応、一〇日間で掘り上げようと計画を立て、それから盗難を恐れて、ほかの班の若手調査員にもお願いをして、泊り込みの調査の毎日でした。

図1は、先ほど言いました、私の班が担当した「フロヤ調査区1区」の全体図です。図面に載せておきますのは弥生時代後期の遺構で、家なり、建物なり、貯蔵穴なりがあります。銅鐸の出土地点は調査区の南の方になります。調査区の北側、変な格好をしていますが、これ、実は旧河道です。昔、川が流れいた所で、名前はわかりませんが、今はたんぼの用水になっています。ですから、この高塚遺跡というのは、足守川と砂川と旧河道の三本の川に開まれた微高地にあります。そして銅鐸が出た所は、この微高地の中でも、より高い所にあたります。

写真1 高塚遺跡の遠景です。右上が東になります。右の山裾あたりに高松城の城跡があります。ずっと細長く、右から左にかけて、道路が通ります。高塚遺跡というのは、もっと広い範囲であるのでしょうか、道路で壊される所だけを掘りましょうということで、このような細長い調査区になりました。



写真 1

63 高塚遺跡の出土銅鐸

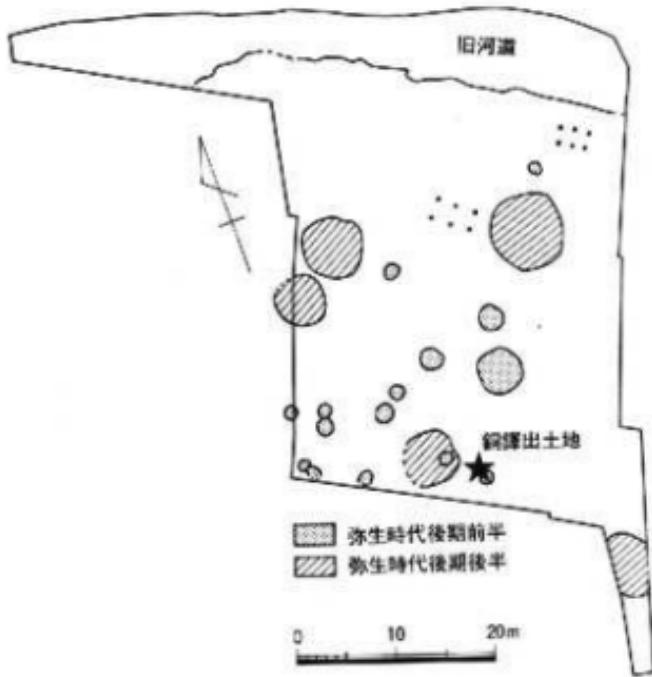


図1 調査区全体図

写真2 砂川の土手から北を見たところです。ちょっと見にくいけれど、フロヤ調査区というのは写真の中央あたりです。この写真は最近のものなので、調査は終了しており、土を盛っています。何度も言いますが、道路の部分だけを掘るわけですから、そこより南は掘れません。銅鐸があともう数メートル南に埋納されていたら、見つかっていないわけです。

写真3 フロヤ調査区1区の写真です。全体をいつべんに広げて調査すると、なんばにもしんどいんで、何区画かに分けて調査したんです。これはフロヤ調査区1区の南東の四分の一の区画で、下が北、上が南になります。銅鐸埋納壙は南端にあります。

埋納壙の部分だけ高く残してありますが、これは、埋納壙を見つけた高さでほかの遺構も出てくるはずなんですけれども、形がはつきりわからないので、全体にもう一段下げているためです。そうすると遺構の輪郭として、丸いのや四角いのが、ハッキリと見えて来るんです。

埋納壙だけは側溝にひっかかるから、側溝の壁を見て「こういう格好をしているな」とわかるんで、これくらい高い所から検出できました。



写真3



写真2

写真4 銅鋸が見つかってから数日たったところです。ジョレンでひっかけた傷が見えます。これはもう何日かたつてゐるんで、キンキラキンじゃないですが、わずかに赤味が残っています。

銅鋸が見つかったのは、側溝を掘った段階ですから、調査が始まつてすぐのことです。ですから、銅鋸を掘る前に、そのうえに乗つかつての遺構を掘らにやいかんわけです。高塚遺跡は、弥生時代から室町時代の終わりごろまでの村の跡が連続と統一する遺跡ですから、先に中世や古墳時代の調査を済ませないといけないわけです。それからようやく、「ボチボチ銅鋸でも掘ろうか」と言いながら掘つていって、「さあどんなもんやろう」と考へるわけです。

写真5 まわりを削り込んで、埋納壙がどういう形の穴か出して見たところです。掘の方に見える穴は、室町時代の柱の穴です。室町時代の人があれちよつと南側に穴を掘つていたら、銅鋸は壊されていました。

埋納壙の大きさは、縦が七五センチメートル、横が四三センチメートルあります。検出した所からの深さは、四〇センチメートルあります。銅鋸は、鋸を直立させて埋められています。そして、下の鱗ギリギリの所まで、穴が掘られています。

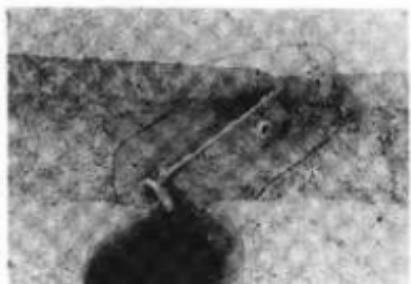


写真5



写真4

写真6 上から、順番に、順番に、掘って行くわけです。まず、半分掘りました。半分掘って、土がどのように埋まっているかを見ました。そうすると、埋納壙の中に入っていた土は、だいたい二層に分かれることがわかりました。上の土1は、まわりの土と良く似た感じの土です。「暗褐色砂質土」という名前をつけましたが、若干炭が入るような灰色っぽい色です。その下にもう一層「純い黄褐色粘性砂質土」、砂は砂なんですがやや粘性のある土2がありまして、この二層に分かれることがわかりました。

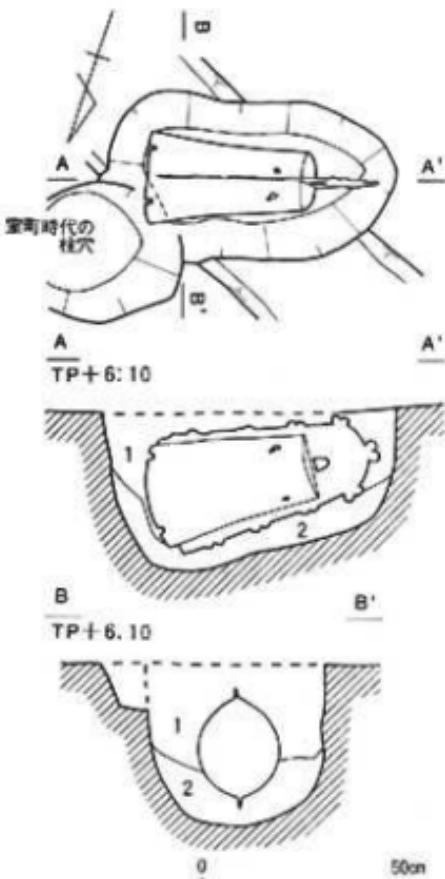


図2 銅鐸埋納壙平面断面図

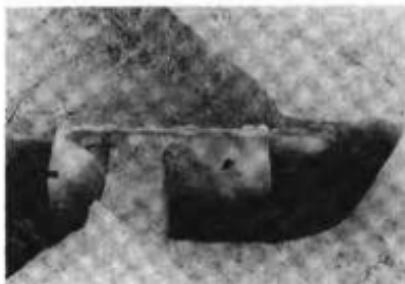


写真6

写真7 先ほどの写真のアップです。まず、穴を掘ります。それから2の土を下の方に埋めます。銅鐸を置いて、まわりの土とかわらない1の土を使って埋めます。そういうことがわかります。

写真8 横断面です。下に2、上に1の土が入っています。

うちの場合も、私の前に報告された跡部遺跡や名東遺跡のように、銅鐸を取り上げた後に、中の土を半分に切って取り出しました。銅鐸の中の土が、一杯詰まっているのか、隙間があいているのかを確認するためです。すると、裾の方では一杯詰まつていましたが、上方に行くにしたがつて、たわんで中空になつていくんです。型持ちの穴から見ていただけば、中空になつているのがわかりになるかと思います。

銅鐸内部の土の中から、土器が出ています。「埋納壙を掘った土の中に土器が入つていて、それを埋め戻した時にそのまま銅鐸の中に入つたんじゃないのか」と、うちのセンターでは考えています。

写真9 記者発表の前日、九月四日の写真です。大いそがしの時なのに、センターのほかの調査員連中がやって来て、「ええもん出たのー」などと騒いでいます。佐原先生にも、お越しいただきました。



写真 8



写真 7

写真 10 挖り上がりの状態です。記者発表当日、九月五日でした。ああ、ジヨレンの傷が見えますねえ。実は、これをやつてしまつたおじさん、すごく後悔していますので、あまり言わないようにしています。側溝を掘つた土はベルトコンベアに乗つて流れていつてしまつたが、土嚢どとうにして五十袋くらい回収しました。そして、事務所の土器洗いのおばさんたちに洗つてもらつて、破片はいくつか見つかりました。

写真 11 銅鋸を取り上げた後の埋納壙です。

写真 12 埋納壙ごと持つて帰ろうということで、埋納壙のまわりを掘つてい



写真 9



写真 10

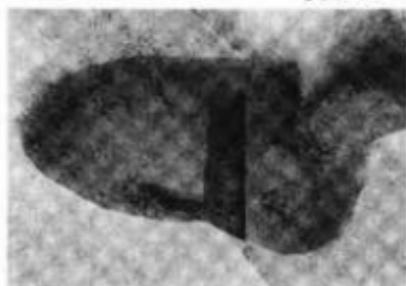


写真 11



写真 12



写真 13



写真 14



写真 15

ます。

写真 13 近畿ウレタンのおじさんに来てもらって、埋納壙のまわりにウレタン樹脂をかけています。埋納壙全体をウレタン樹脂で包むわけです。

写真 14 ああなんと、あわれ巨大ショートケーキと化した埋納壙は、パワーショベルに吊り下げられ、とうとう近畿ウレタンの車で連れ去られて行きました。

写真 15

写真 15 銅鋒埋納壙の中から出た土器です。台付き鉢の口の所です。岡山の編年でいいますと、弥生時代後期初頭の土器です。ですから、銅鋒が埋められたのは、弥生時代後期初頭よりも新しい時期であるということになります。

写真 16 掃除が終わった銅鐘です。高さ五八センチメートル、紋様は流水紋なんですが、突線が一本まつて三つに区画してあります。良く見ると、縦にも三本の線が入っています。この縦の線は区画といえば区画なんですが、流水紋自体がこの線を突き抜けたりしていく、区画と考えるよりは、鋸身に紋様を刻む時に目安となる「割付け」の線と考えています。

写真 17 反対側です。先ほどの側は、型持ちの穴の付近が割れていて格好が悪いですが、こちらの方が見ええがします。先ほどの写真と比べて見ればわかるのですが、作った人が失敗したのか、三つに区画された一番下の流水紋が、表と裏とで一単位ずれています。

写真 18 横から見ると、こんなに食い違っているわけです。ちょっと格好悪いですね。作った人の設計ミスだと思うんですが…

写真 19 銅の部分です。一番外側には、突線がまわ

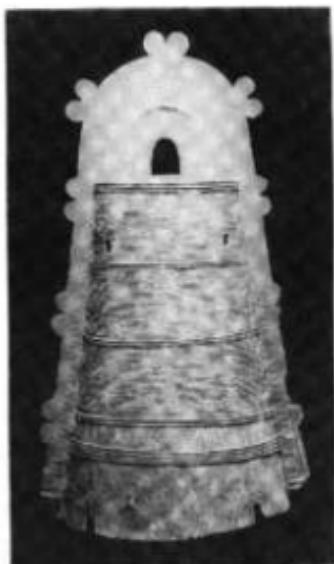


写真 17

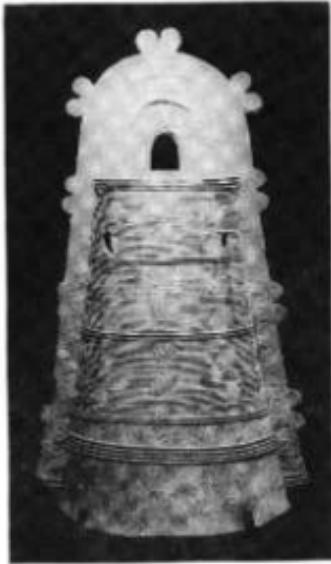


写真 16

ります。それから鋸歯紋、のこぎりの刃のような紋様ですね。次に突線、また鋸歯紋があります。突線がまわって綾杉紋、これが「菱環鉢式」と呼ぶ断面菱形の最古の形式の銅鐸の吊り手の名残りです。そこより内側にまた突線、鋸歯紋があります。一番内側に突線がまわるという紋様になっています。

写真20 鐸身の紋様です。バツと見はきれいですが、よく見ると正確な平行線で引いた紋様ではありません。たとえば、一本たどつていって、グルグル・グネグネまわつて同じところに戻るというわけではありません。そういう線もあるんですが、だいたいは起点があつて、それをたどると別なところへ出でしまう。そういう紋様なんです。

私自身暇な時に、紋様を一本ずつ描いていって、色鉛筆でたどつていったんですが、目がまわりそうになりました。ひどいのになると、独立した「メガネ」と



写真 19

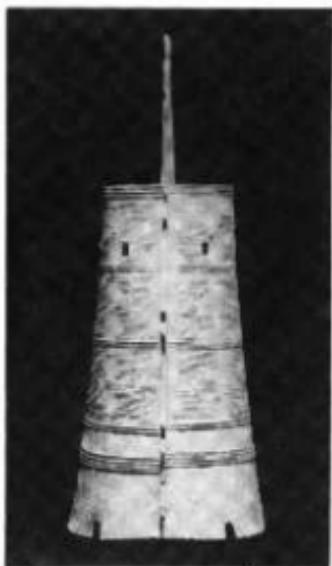


写真 18

呼ぶ輪になるはずのものが、あちこちの紋様に出入りして、とんでもないところで終わったりしています。

紋様のつけ方というのも一本一本描いていったんじやなくて、我々がセンターで話しているのは、「最初に平行線を何本か引いて、それを外側から扇形につないでいくんじやないか」とか「扇形の半円部分の一一番内側に、一本余つたら一本置いとこう、二本余つたら一本をつなげてしまおう」とか、そんな感じで紋様をつけたんじやないかな?というふうに考えてています。

**写真21** これも不細工な部分のアップです。一番下の単位は途中で突線に切られています。鋸身の柄の下辺横帯には、二本の突線がまわって、次に鋸歯紋、四本の突線がまわります。鋸歯紋は、鎧も鉢も下辺横帯のところも、すべて左上がりの右下がりとなっています。

写真や図2で見ていただきましたように、銅鐸の埋納の方法がある程度わかりました。銅鐸埋納壙の中では、1暗褐色砂質土と2鈍い黄褐色粘性砂質土の二種類の土が確認できました。これから考えまして、銅鐸を埋めるには、まず穴を掘ります。そして、掘り上げた土とは違う土2を穴の底に敷きます。銅鐸



写真 21



写真 20

を置いて固定した後、掘り上げた上へ埋め戻す、ということがいえます。

先ほども言いましたが、埋納壙の中から出てきた土器写真15は、弥生時代後期初頭の台付き鉢の口縁部なんです。これから考えて、銅鐸が埋められたのは弥生時代後期初頭以降だということがいえます。

図1には、銅鐸埋納壙以外の弥生時代の遺構を載せてあります。点々で表した遺構は弥生時代後期前半のものです。小さい丸は「袋状土壙」と呼ぶ貯蔵穴で、大きい丸は住居址です。斜線で表した遺構は弥生時代後期後半のものです。袋状土壙はすべてが弥生時代後期前半のもので、住居址はほとんどが弥生時代後期後半のものです。

ですから、集落内における銅鐸の位置というのは、弥生時代後期初頭以降に埋められたと考えられますから、もし後期前半であれば袋状土壙に埋まれた位置、後期後半であれば、住居に開まれた位置に埋納されていたといえます。

以上で高塚遺跡の報告を終わります。どうもありがとうございました。



銅鐸とはなにか？

奈良国立文化財研究所

佐  
原

眞



こんにちは、佐原です。

今、安井館長から「銅鐸の第一人者」と紹介されました。そう言わると格好いいんですが、銅鐸をやつてる人は少ないんです。一生懸命やつてる人というのは、「一二三人でしょうか。だから、そういう意味ではみんな第一人者です。私は今、「考古学をやさしくしよう」という運動を起こしてまして、「喋る時も書く時も、考古学に関心のない人が聞いてもわかる言葉で喋り、書く」ということをモットーにしております。ただ、自分のわかっていることをわかりやすく言うことはできるのですが、わかっていないことをわかりやすく言うといふことは不可能です。安井館長に「銅鐸とは何か?」という標題を与えられてしましましたが、それはわからないのです。ですから、「なぜわからないのか」ということを、わかりやすくお話ししたいと思います。

#### \*なぜ銅鐸と呼ぶのか

まず「鐸」の字ですが、この字は日本国民として生まれて一度も習うことはないし、使うこともない字です。なぜ「鐸」という言葉が使われるようになつたか、という説明から入つた方がいいと思います。

今から三五〇〇年くらい前、中国には殷<sup>じん</sup>あるいは商<sup>しょう</sup>という時代がありまして、たくさんの青銅器を作り始め、使い始めました。「青銅」とは、銅に錫を加えた合金のことと、「青銅」と言っていますが、英語で「ブロンズ」と言つた方がわかりやすいかもしれません。一つ断らなければいけないのは、銅に錫を加えたものが「青銅」なんですが、このことを単に「銅」と言うことがあるんですね。これ、ひじょうにややこしいですね。つまり、「銅」と言う場合には、銅でできているものはもちろんのこと、銅に錫を加えた青銅のことも「銅」と呼ぶことがあるということです。今はなくなりましたけれど一錢銅貨も青銅ですしお駅前や公園などに立っている銅像、あれも実は青銅でできているんです。同じように、銅鑄も青銅でできているんです。だけども「銅」と言うわけです。ややこしいですね。

実は私、きのうの今頃は上海と大阪の間を飛んでおりました。中国に八日ほどおりまして、向こうで殷・周の時代のたくさんの青銅器を見て参りました。殷・周の貴族や有力者たちは、たくさんの青銅器をおまつりに使いました。そのおまつりの道具の中に、たくさんのがれがあります。時代によつて名前が変わつたりしてややこしいんですが、簡単に三種類のがれの名前を挙げていきま

しょう。「鈴」、「鐘」、「鐸」です。「鈴」と「鐘」は我々が時々目に見る字です。

「鈴」は日本では「すず」と読みます。猫の首に付けるああいうものを「すず」と言います。だいたいが丸くて中に「丸」と呼ぶ粒が入っています。丸は右のこともあるし、青銅でできていることもあります。そして、揺れて鳴ります。「鈴」は、中国でもすずの意味でも使います。しかし、もう一つほかの意味があります。それは、吊り手(=「鉤」)があつて、内側に棒(=「舌」)があつて、それが揺れ鳴る。そういうベルを、「鈴」で表わしているわけです。

「鐘」は我々に一番おなじみのある「かね」ですけれども、あれには「吊り手」はあるが「舌」はありません。これは、「叩き鳴らすカネ・あるいは撞き鳴らすカネ」です。お寺の釣鐘、昔火事を知らせるのにカンカン鳴らした半鐘、まさにこの「鐘」です。

「鐸」はいつたい何かといいますと、取手、つまり柄があつて、中に「舌」がある「振り鳴らすカネ」です。私は大阪の豊中で少年時代まで過ごしましたが、あのころのお豆腐屋さんやくず屋さんは「ジャランジャラン」と鳴らしながらやつて来ました。それから、ここにお集まりの方で私より年上の方の中に

は、学校の授業の始まり・終わりがこのカネを振り鳴らした「ガランガラン」だったのを憶えていらっしゃる方もあるかもしません。私の時代には、もうサイレンになつていましたが……。

そもそも中国では、柄を付けて振り鳴らすものを「鐸」の文字で表わしたわけです。それが日本へ来てちょっと変わってしまいました。ところが大変なことだと思うんですが、日本では仏教とともに釣鐘が始まります。釣鐘が始まると同時に「揺れ鳴るカネ」も始まるんです。

例えば、奈良西大寺のある建物の上には、屋根の上に鳳凰がいて、鳳凰のくちばしに「銅鐸」が下がっているというようなことが書いてあります。これは「揺れ鳴るカネ」です。日本ではこれを「鐸」という言葉で呼び始めています。つまり「撞き鳴らす鐘」と区別して、本来中国で「鈴」と言っていたのを「鐸」と呼ぶようになりました。奈良正倉院の宝物の中には、聖武天皇の一周年忌に使った「鎖鐸」が残っています。その「鎖鐸」というのは、今私たちがいう鎖鐸と形は少し違っていますが、基本的には、吊り手のある「揺れ鳴るカネ」です。奈良時代には、中国でいう「鈴」のことを日本で「鐸」と呼んだわけです。

正倉院の「鎖鐸」



何がすごいかと言うと、銅鐸が一番最初に出てきた記録は、西暦六六八年、天智天皇七年なんです。滋賀県の大津市にある崇福寺というお寺の建設工事で出てきたんですが、その時に「宝鐸」、たからの鐸が出て来たという記事があるんです。次の記録は、「続日本紀」という書物にあるんですけれども、西暦七一二年、和銅六年に「大和の国宇陀郡、長岡野ながおかのといふ所から銅鐸が出て來た」と書いてあります。「銅鐸」という文字が現れるのは、この時が初めてです。何が偉いかというと、出て来たものを見て「鐘」じゃない、ということがわかつたんですね、區別したんですね、奈良時代の人があ…。

これは、私は大変なことだと思うんですよ。なぜかというと、銅鐸に伴う舌が見つかったのは昭和に入つてからのことなんです。まだ五〇年もたつていなかかもしれません。銅鐸に伴う舌は、まず鳥取県で一つの銅鐸に伴つて二つの舌が出て来ています。それから、兵庫県の淡路島で、江戸時代に出て来た銅鐸をお寺さんが持つていて、それと一緒に舌があるんですが、そういうものがあることから、「銅鐸とは本来そういう棒で鳴らしたんだ」ということが考古学的に立証されるわけです。奈良時代には舌が出ていなかつたのに、撞き鳴らす普通の鐘と違うということを区別していた。これは大変なことだと思います。

鳥取県出土の  
銅鐸と二本の舌



舌を下げる銅鐸



なぜ「銅鐸」と呼ぶのか、ということについては、そういうわけです。ですか  
ら、銅鐸のことを、よく「弥生時代のカネ」というふうに言ってしまうんです  
が、あれは誤解を招きます。「カネ」と言うと我々はお寺の鐘の方を連想して  
しまうから、私は最近では、強いて「ベル」と言うことにしています。銅鐸は  
ベルの一種であるということです。



流水紋銅鐸と銅鐸の部分名

\*銅鐸の紋様 その1 紋様の種類

一番上の部分が吊り手で、これはさつきも書いたが、「鉢」と言います。それに対し、下の本体の方は「身」と呼ぶか、あるいは銅鐸の本体ですから「鐸身」と呼ぶこともあります。鐸身の外側に突出する扁平な飾りの部分は、お魚のヒレに良く似たつらぎをしていますから、「鱗」と呼びます。

代表的な紋様の名前を挙げますと、今回出て来た跡部の銅鐸は、「流水紋」を飾っています。見ていただいたら良くおわかりのように、日本の中世以来の紋様で、水を表わす時にこのようにします。「菊水」なんていう紋様も、水をこのように現わします。これに似ていることからついた名称ですが、水を表したもののかどうかはわかりません。私は、水を表わしたものではないと思います。

それに対して、縦の帯と横の帯を交差させる紋様のことを「姿製櫻紋」という難しい言葉で呼んでいます。横の帯の本数は二、四本あって、帯には斜めの格子がはいることが多いです。実は、これはお寺の銅鐘の紋様の名跡なんです。お寺の銅鐘の紋様も縦横の帯を交差させていて、これを江戸時代から「製装櫻」と呼んでいます。その紋様の名前を借りておきます。名前の由来は、お坊さんの着る袈裟に縦横の帯の交差する紋様があることから来ています。

銅鐸の身を飾る紋様には、「流水紋」・「製袋櫛紋」が一番多いです。それ以外には、横の帯だけでできている「横帶紋」と呼んでいる紋様もあります。

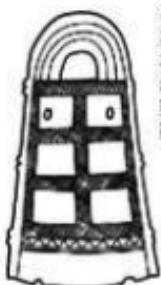
鱗を飾るものには、三角形が連なった中に斜めの線のある紋様がありますね。これは「鋸齒紋」と言いますが、昔は「銅鐸式鋸齒紋」と呼びました。なぜかというと、「鋸齒ノコギリ歯」というのはジグザグのことですから、その中に線が入つていよいがいまいが、とにかく鋸齒紋なわけです。銅鐸の鋸齒紋には必ずこの線が入っていますから、昔は「銅鐸式鋸齒紋」と呼びましたが、現在銅鐸の話をする時に「鋸齒紋」と言えば、この線の入つた「鋸齒紋」のことを指すわけです。

吊り手の部分には、「綾杉紋」という紋様があります。「杉綾」と呼ぶこともありますが、銅鐸の場合には、「綾杉」と呼んでいます。それから、満巻きがありますね、それは「渦巻紋」と言います。

#### \*銅鐸の作りかた

銅鐸をどうやって作るかをお話しましょう。鑄物を作る方法は、型を作つて、そこへ溶かした金属を流し込むのです。

横帶紋銅鐸



横帶紋銅鐸



一番簡単な方法は、一枚の型だけで作る方法です。幼稚園の子供たちが、粘土遊びでやっています。ゾウさんなんかが彫り窪めてあって、そこへ粘土を詰めるとゾウさんの姿が立体的に突出するような型があります。

こういう鋳造品はたくさんあります。すぐに浮かぶ日本の代表例は、伊丹市にある伊丹庵寺というお寺の塔の一層上に使っていた「水煙」<sup>すいえん</sup>が一枚型ででています。一枚型でできているということは、一方から見ると突出していませんが、逆から見ると、ただ平らで汚らしいだけのものです。秦の始皇帝が作った銅のお金「半兩錢」というのもそういうものです。鋳造技術の一番初步的なものは一枚型です。

今度は二枚型です。さっきのゾウさんを両側に、しかも左右相称に向きを変えたものを作つてやれば、両側から見てゾウさんに見えることができます。調焼きがそうですね、右向きと左向きのお魚の鋳型を使って作るわけです。

だけど、これでもまだ銅鐸はできないんです。なぜならば、銅鐸は鐸身の内部がガランドウですから、今言つた調焼きよりも複雑な鋳型が必要になつて来ます。というのは、銅鐸の場合は、内側にも型がいるわけです。古い銅鐸は石で鋳型を作つてあるんですが、これはすごいことですね。たとえば大部分の仏

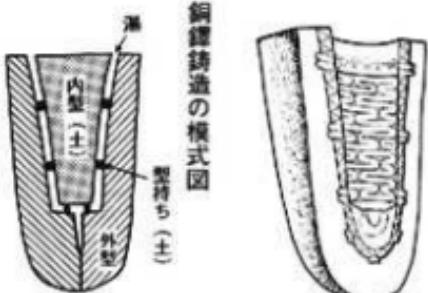
## 石の外型

像が青銅でできていますが、あれは彫刻師が木や土で仏様の姿を作つてそれから型を起こすわけでしょう？だから完成した姿をまず最初に見て、それから型を作るわけです。ところが、石を鋳型にする場合は完成した姿がないわけです。見えないわけですよ。完成した時に初めて「ああ、こういうことだったのか」ということがわかるわけで、仕上がった状態を頭の中で考えて彫るわけですから、これはすごいと思います。

中空の鋳物を作るためには、外型の中に内型をはめた鋳型がいるわけです。そうでないと、中空のものができません。そこで、まず、石で鋳型を半分作ります。まったく同じものをもう一つ作ります。その次に、一番簡単な方法として、二つの型を合せた中の空間に土を詰めます。すると銅鐸のようなものができるがります。その表面を削り取つて内型を作りますが、簡単には削れません。というのは、削り込んだ幅が将来できる銅鐸の厚さになるからです。石でできた外側の型の中に、土でできた内側の型をはめこんだ状態にして、そのまわりに溶けた銅を注ぎます。

当たり前のことですが、この時に内側の型が外側の型にひつついてしまふと、できあがった銅鐸には大きな穴があいてしまいます。また、どちらかへかたよ

銅鐸鋳造の模式図



つてしまふと、一方が厚く一方が薄くなってしまいます。そこで、内側の型がズレないように、「型持ち」という支えを置きます。この「型持ち」を置くことによって、内側の型が外側の型にキチンとついて、ずれることはありません。現在の铸造ですと、型持ち自体が金属でできていて、熱くドロドロになった金属を注ぐと溶けてしまって製品の一部になってしまいます、という方法があります。けれども銅鐸の場合はおそらく土で「型持ち」を作っているために、仕上がりた製品ではそこに穴があいてしまいます。それが、型持ちの穴です。

そしてもう一つ銅鐸にとって重要なことは、銅鐸の一番下の部分、内側の模から少し入ったところに突出した帶があるということです。突出した帶があるということは、外側の型が石であっても内側の型は石ではない、ということの証明になります。内側の型は上じやないといけないんだ、ということになります。

さて、熱くなつた溶けた金属のことを「湯」といいますが、鋤の側から湯を注ぎ入れますと、それがフワーッと全体にまわって上がつていきます。それで終わるわけなんですが、空気が入り込んだりして铸造がうまくいかない場合があります。空気が入ると気泡ができてしまい、その部分には湯がまわりません

から、穴があいてしまいます。そういう場合は、穴のあいた部分に、いつたん  
鋳造が終ってから改めて湯を入れて補つてやるわけです。ところが、銅鐸とい  
うのは鋳型に刻み込んだ部分が紋様になりますから、紋様の線はすべて突出し  
ていますね。朝鮮半島の青銅器文化では、鋳型の段階で突出した紋様を作るこ  
とができたので、仕上がった状態での沈んだ紋様や絵があります。この技術は  
日本には入つて来ていませんから、日本のすべての青銅器の紋様は、製品では  
突出しているわけです。だから、部分的に鋳造が失敗して穴があいてしまうと、  
後からいくら銅を入れてもその部分の紋様を突出させることはできないのです。  
そこで、そこには鉄の刃物で線を刻むわけです。

今回の銅鐸は、鋳造を失敗したためB面の一一番上の流水紋の上から七段目あ  
たりに、後から線を引き直しています。それをこの話しが終わつてからゆつく  
りご覧下さい。銅がうまくまわらないで、後から線を刻む銅鐸は、たくさんあ  
ります。銅鐸にとつては、紋様を完全につけるということがひじょうに大事な  
ことだったようです。

また後ほどお話しをしますが、銅鐸には絵を描いたものもあります。絵を描  
いたものは、失敗していても絶対に補うということはしていません。というこ

とは、銅鐸にとつては紋様が一番大切なんですね、絵は付け足しなんです。そういうことは、また後でお話ししましょう。実は、銅鐸にとつては、紋様がついているということがひじょうに大事なことなんです。

#### \*銅鐸の埋まり方

さて、この不思議なる銅鐸は、正確に何個出ているかわかりません。なぜかと言ふと、例えば、「八尾市春日町の跡部遺跡から銅鐸が出た」ということは確実なことです。ところが、先ほども言いましたが、銅鐸が見つかり始めたのは西暦六六八年という大昔からでしょう。そうすると「どこそこで銅鐸が出た」という記録が残っていても、その銅鐸自身がどこへ行ってしまったのか、わからないものもあります。あるいは淡路島の場合がそうですが、ある文献には「七個出た」と書いてあるのが、ほかの文献では「三個」となっています。また、銅鐸自身はあるけれども、どこから出て来たのかがまったくわからないものもあります。さらに、「どこそこから出て来た」と伝えられている銅鐸がありますが、これは本当にどこからでたかわかりません。ですから、銅鐸の本当の数はわかりません。皆、適当に書いているのです。とにかく、最近では

「四百個から五百個」と口つてゐるでしようか。銅鐸は、西は中国地方の島根・広島、四国の香川・徳島・高知、東は福井・岐阜・長野・静岡というふうに、近畿地方を中心としたその範囲で出ています。ただし、九州で銅鐸の鋳型が二箇所から出ていますから、九州にもあった可能性があります。

展示室でご覧になつたように、銅鐸は、すべてが穴に埋められた状態でみつかっています。しかも、出土状況のわかつてゐるものの中絶対多数が、銅鐸を横向きに寝かせて埋められています。大切なもののなら、掘つた穴の壁に石を積んだり、上に蓋石を被せたりしても良さそうですが、そういうことは一切していません。

今回の銅鐸は、八尾市の中でもひじょうに低い所から山で来ました。八尾から銅鐸が出たと聞いた時、私は当然山寄りの所だと思いました。ところが、来て見たら平地だったので驚きました。というのは、大多数の銅鐸は斜面に埋めてあるからです。

つい最近静岡で銅鐸が出て来て、もうそろそろ発掘が始まりますが、これはご当地八尾の方が金属探知機で銅鐸を見つけられ、教育委員会へ届けられたことが契機になつたわけです。そこへもついこの間行つて来ましたが、やはり斜

面でした。もう少し頑張れば頂上へ着くというような所でした。頂上には埋めずに、頂上より少し低い所、頂上を意識した所に埋めていることが多いんです。それが最近では、低い所からでも出て来る例が増えて来ています。今日、私の前に発表されました大福遺跡・名東遺跡・高塚遺跡、みんな低い所の例です。そうですねえ、私は数を数えていないのでわかりませんが、おそらく銅鐸の八割から八割五分くらいが丘の斜面から出ていると言つてもいいでしょう。しかも、そのうちの大多数が、弥生時代の村の中からの出土ではありません。丘の斜面ですから、おそらくは人里離れた所に埋められたのでしょうか。それが、銅鐸の分布であり、埋められ方です。

#### \*銅鐸の性質（年代の決めかた 型式学的研究）

それでは、銅鐸とはいつたいどういうものであるかということ、その性質を考えてみましょう。性質を考えるには、まず、銅鐸を年代の順に並べなくてはいけません。なぜかといふと、一番古い銅鐸を使って「銅鐸がいかにして消えたか」を論じることは意味がないし、一番新しい銅鐸を見て「銅鐸の起源」を考えるのも意味がありません。ですから、銅鐸自身の順番を決めなければなら

いのです。ところが、順番は決めにくいわけです。なぜならば、普通の考古学の発掘で村の跡やお墓を掘っていると、この土器とあの石器が一緒に出てくるということから、年代が決めやすいんです。それに対して銅鐸は、一つだけボツンと出て来ることが多いので、なかなか順番が決めにくいのです。

そこで、考古学では「型式学的研究」と言うんですが、銅鐸自身を比べて順番を決めます。銅鐸は、バフと見たらみんな同じように見えますが、そのつもりで見ますとずいぶん違います。この「銅鐸を年代の順に並べる」編年へんねんといふ仕事をしなければなりません。その場合に有効な手掛りになるのは、「役割・機能を持っていた部分がその機能を失う」ことを見付けることです。私はこの話をする時には、必ず背広の説明をすることにしています。



①



②



③

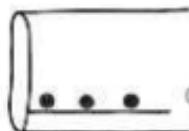


④

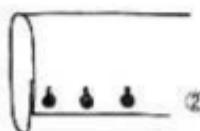
背広の編年

背広は元々「詰め襟」なんです①。それをヨーロッパのどこの國の人でしょうか、ワイシャツを腕まくりするのと同じように、わざわざ第一ボタンをはずして着る人がいたんですね。これが背広の起源です②。私が今着ている背広は襟を折ると「詰め襟」のようになります③。しかし、テレビで歌つたり踊つたりしている人の背広にはすごいのがあって、襟を倒してももう元の「詰め襟」には戻りません④。そうすると、考古学的には「本来の機能を残している③が古い性質を持つていて、④のようにその機能をなくしたものが新しい」と考えて、その逆になることはありえないと判断します。

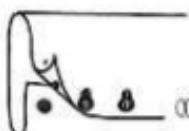
こういう例は、背広の袖口にも見られます。袖口のボタンも最初はワイシャツの袖のように開け閉めができたときの名残りなんです。かつては開け閉めをしていたわけです。そして、糸で作ったボタン穴の名残がありますよね、縫じてあります。本来はボタンとボタン穴が付いていた①ですが、そこにボタンをつけて、さらにボタン穴のように糸でかがって、あたかもボタン穴にボタンを掛けたかのような形をまねています②。ところが、もう少し略式になりますと、ボタンは付いていてもボタン穴はありません③。これも、本来「開け閉め」の役割を持っていたものがドンドン消えて行くですから、②から③へ



①



②



③

袖口の編年

と新しくなっても、その逆はあり得ないのです。考古学では、そのような見かた、考え方をするわけです。ところがややこしいことに、ワイシャツは今でも開け閉めしているわけですから、背広とワイシャツを一緒にすると混乱します。背広とワイシャツが同じ種類のものだと誤解してしまうと、どちらも同じ時代のものでありながら、「ワイシャツが古くて背広が新しい」という誤解をしてしまうこともあります。うなづけるわけです。

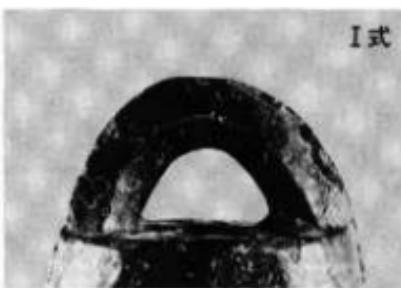
自動車を例にしますと、トラックが最も古い性質を持つていて、スポーツカーが一番新しい性質を持つています。乗用車はその中間の性質を持つていると言えます。将来の考古学者が、乗用車とスポーツカーと一緒に研究すると混乱してしまいます。乗用車は乗用車、スポーツカーはスポーツカーで「編年」、いわゆる変遷を追って行かなければいけないです。

そういうような研究方法を「型式学的方法」といいますが、これを銅鐸でやりました。私が学生時代の頃のことですから、すでに三〇年くらい前になります。その時にやったのは、吊り手の中にある「綾杉紋」の部分の観察です。今回の銅鐸は複雑な紋様を持っているんですが、不思議なことにどの銅鐸を見てても、吊り手の内側にある綾杉紋のところが突出しているんです。ほかは平らな

II式



I式



んですが、綾杉紋で飾られている部分だけが突出しています。これを縦に断ち切ると、断面形が菱形になります。あれが不思議でしうがなかつたんです。今回の銅鐸には菱形の外側にも内側にも平らな飾りの部分があります（Ⅲ式）が、外側にしか平らな部分がないものもあります（Ⅳ式）。さらに、きわめて少数ではありますが、吊り手が菱形の部分だけで成り立っている銅鐸のあることも知りました（Ⅰ式）。

そこで、菱形の部分こそ本来の「吊り手」の役割を果たしているもので、平らな部分は吊り下げるには必要ないけれど、飾るのにふさわしいことから、菱形の部分から平らな部分を作り出したんじやないかと考えたわけです。そのようしたことから、私は銅鐸の移り変わりを考えました。

Ⅲ式では、外側だけではなく内側にも飾る所を作っています。装飾の部分を加えています。その次に来るものとして、基本的にはⅢ式と同じ形でさらに太い線を加えたものがあります（Ⅳ式）。その形のものは、滋賀県野洲町小篠原という所からたくさん出ていますし、この近くだと羽曳野市西浦という所からも出ています。吊り手の部分が小判形というのか馬蹄形というのか、ひじょうに長く伸びていて、菱形の部分も一つだけではなく、いくつも重ねています。



N式



III式

小篠原の「一番最後の銅鑄」に高さ一三五センチメートルという大きなものがありますが、これには菱形の部分が三つも重なっています。この銅鑄を作った人は、この部分がもともとは「吊り手」であったということを完全に忘れ去ってしまっていて、「飾りの帯の一つ」としてしか理解していなかつたというわけです。

今話しているうちに気がつきましたけれど、京都国立博物館の難波洋三さん  
がここに来ておられます。彼は私の分類をさらに細かくしてくれたと同時に、  
訂正をしてくれました。ですから、現在では銅鑄はかなり細かく区分できるよ  
うになっています。

#### \*銅の成分

今度は銅の成分です。先ほども言いましたが、青銅とは、銅に錫を加えた合  
金です。銅錫の原料はひじょうに重要なわけですけれども、これについては相  
入れない二つの説があります。

一つの説は、久野雄一郎さんの「日本の銅を使つた」というものです。これ  
は、特に新しい銅錫には溶けきれていない銅の結晶が入つていて、その結晶を

調べた結果から、日本の銅を使ったに違いないという説です。

もう一つの説は、馬淵久夫さんという東京国立文化財研究所の方の説で「中国あるいは朝鮮半島の銅を使った」というものです。銅鐸を鋳造する時には鉛を加えるんですが、鉛に関しては、古いもの（I式からII式）には朝鮮半島の鉛が入っていて、新しいもの（II式の一部からIV式）には中国の鉛が入っています。ちなみに、古墳時代の鏡などの青銅製品には中国南部の鉛が入っていることが確実にわかっています。そして、馬淵さんは、鉛だけではなくて銅や錫も、古いものは朝鮮半島から、新しいものは中国から来たと考えています。

いろんな考え方の違いがありますが、私の考えでは、近畿地方では弥生時代前期（一期）から銅鐸を作り始め、後期（V期）のある時まで作っています。

その間、近畿地方が銅鐸鋳造の中心地であったことは確実ですから、どこの原料であれ連続的に集中して銅鐸の原料を確保していたということは確かなことです。そして、奈良県の唐古遺跡や、大阪府東大阪市の鬼虎川遺跡、同じく茨木市<sup>（ひづなり）</sup>の東奈良遺跡などから銅鐸の鋳型が出ています。中でも特に、東奈良遺跡からは銅鐸の鋳型がたくさん出ていまして、銅鐸を鋳造する技術者がそこに常駐していたということが認められるようになって来ています。

## \*銅鐸の鳴らしかた

銅鐸の変遷に伴つて重要なことは、吊り手の形の移り変わりからでもわかるように、本来は「耳から音を聞くためのもの」でした。それが新しくなるにつれ、「見ること」が重要になつて来ました。銅鐸の性質が変わつて行つたということです。田中琢さんはそれに対して、I式からIII式までを「聞く銅鐸」、IV式を「見る銅鐸」と呼んでいます。明確に性格がわかれます。

古い銅鐸が鳴らされたに違ひない、ということは、銅鐸の下から見てすぐの所にある帯の一部分が、棒と接触して擦り減つていることからも確定です。ところが、どうやつて鳴らしたかについてはわかりません。もし吊り下げて鳴らしたのであれば、吊り手が摩滅していくてもいいはずなんですが……。銅鐸の起源と密接な関係があると思われるものに、朝鮮半島の「朝鮮式小銅鐸」と呼ばれているものがあります。これは吊り手が擦り減つて、上の部分が細くなっています。銅が擦り減るか?と思われるでしようが、実は擦り減るんですねえ。また、古墳時代に「三環鈴」という鈴のような物を連ねたものがあります。これには古いものと新しいものがあつて、古いものは本当によく擦り減つている部分があります。これも、ぶら下げる使つていたから擦り減つているんですね。



朝鮮式小銅鐸

だから、銅鐸もし吊り下げるなら、そして内側の帯があれば擦り減るまで鳴らしたんなら、吊り手の部分に「紐ずれ」というのか、摩滅が残つていて当然なんですが、それがないのです。不思議ですねえ。私は実験したことはないんですが、抱え込んで搔すつて鳴らすことしか考えられないんです。古い銅鐸には身の部分が摩滅しているものがありますから、そういう方法も考えられないことはありません。だけど、抱え込んで鳴らすなんてねえ……本当に困ったことです。見て来たように「鳴らしたんだ」と言つているのですが、吊り手に紐ずれの跡がありませんから、吊るして鳴らしていません。吊るせば絶対に紐ずれの跡は残りますから……。だいたい銅鐸というのは、鳴らすのが無理な構造のカネなんです。

私の考え方をごく簡単に言つてしまえば、銅鐸の起源は家畜の首に吊り下げられたベルだということです。家畜だと動いてくれるから鳴ってくれます。これを鳴らすためには内側に「舌」をぶら下げておけば、簡単に摺れて鳴るんです。銅鐸は叩いて鳴らすカネではありません。棒（舌）がありますから。もしも舌の下にも孔があれば、昔の軍艦や汽車のベルのように、舌の下の孔に紐を通して、それをひっぱって「チヨンチヨン」と鳴らす方法が考えられます。そ

「ういう孔もありません。しかし、鳴らしたには違いないんです。『どうやつて鳴らしたか』これがたくさんある銅鐸の謎の中の、未だに解決できていない謎の一つです。私は、それについては『わかりません』としか答えられません。わからぬことがたくさんあって、一度懲りたことがあります。出雲の荒神谷(アマツヒル)から銅鐸が出て来た時に「わからない」と言つたら、新聞記者に「わからぬなら誰でも言えますよ」と言われました。」はぼつたいたようですが、青銅器を永年にわたつて勉強して來た者が「わからない」と言うのは、同じ「わからぬ」でも少しほど重みがあるんじやないかと、うぬぼれていましめたが、「わからぬ」と言つたと「誰にでも言えますよ」と言われてしましました。

「銅鐸とは何か?」については答えられません。わからぬんですから……。そのわからぬもののうちの一つが、今の問題なんです。

#### \*銅鐸の使いみち

「銅鐸は何に使つたか」これもわかりません。そして、「なぜ埋めたのか」これもわかつていません。なぜ埋めたのかがわかれれば、銅鐸の謎はかなり解決されると思います。

幸いにして銅鐸が発掘されるようになりました。夢のような話です。私が銅鐸を勉強し始めたころには、銅鐸の鋳型も見付かっていなかつたし、銅鐸が発掘されることもありませんでした。「銅鐸が出た！」と聞いて飛んで行きますと、「この辺にありましたワ」とか、「この辺ですワ、もうちょっと高いところやつたかな？」と空中を指されました。穴が無くなっているのが当たり前でした。

今回の銅鐸で重要なことは、「穴の底に銅鐸を固定するための粘土が敷いてあつた」ということがわかつたということでしょう。これは、おそらく初めて注意されたことだと思います。それからもう一つは、「銅鐸が入っている穴の土は粘土っぽくて、銅鐸の穴の外は割に砂っぽい」というように、銅鐸の埋まっていた穴の内と外で土が違うということが認められたことで、これはひじょうに大切なことです。同じようなことは、先ほど報告があつたと思いますが、高塚遺跡や同じく岡山の百枝月（もえづき）という所でも、穴の内側と外側では土が違うということが認識されています。

これがなぜ大切なことかというと、「さあ銅鐸を埋めましょう」と言って、穴を掘りました。そして穴の中に銅鐸を入れて、掘り返した土を戻します。そうすると、穴の内と外の土は同じはずです。ただし、銅鐸を埋めるべき所の土が、た

とえば黄色・黒・砂という具合にいくつにも層が分れていれば、それが混ざった状態で穴の中に戻されますから、外とは区別ができます。そういう程度の差というのが、正直なところかもしれません。だけど少なくともいくつかの銅鐸について、穴の中と外の土とが違う「」ことが認識されたということは、大切なことなんです。つまり「さあ埋めましょう」と言って、ボツと埋め戻したのではない「」ことになりますから。

銅鐸は、「一回きり埋めた」という考え方と、私のように「普段は土の中に埋めていて、おまつりの時に出して来て、使うとまた埋める」という考え方とがあります。私の場合は、同じ穴に何度も出したり埋めたりしてもかまわないし、そのたびに埋める場所を変えてもかまわないんです。かつて「銅鐸は埋めるために作られた」と考えた人がいるんです。つまり、「作ったらすぐに埋めちゃった」という考え方ですが、あり得ないとは言えません。けれども内側の帯が擦り減っている銅鐸もありますから、古い銅鐸はかなりの長い期間、使っていたことも確かでしょう。というように、一つの銅鐸について、どういう状態で埋まっているのか、銅鐸自身がどういう状態なのかを観察しなければなりません。今回の銅鐸についても、かなり進んだ観察をしておられますから、や

がてそれらを報告されると思います。とにかく、埋まりかたや埋めかたが、銅鐸の扱い、ひいては銅鐸の性質を明らかにする一つの重要な鍵を握っていると言えます。

かつて、銅鐸は社会が急変した時に埋められると考えられていました。現代の日本で言えば西暦一九四五年、昭和二〇年にあれだけ世の中がガラッと変わりました。その時と同じような時、「弥生時代から古墳時代へと社会が変わってしまう時に、社会の変事に際して埋められたのではないか」とか、「敵や他の民族がやって来るから取られないように埋めてしまった」というような考え方もありました。けれども、それはないでしよう。なぜならば、わかっているもののはほとんどすべての銅鐸は、同じように鏃を立てて横向きに寝かせて埋められています。もし急いで隠すために埋めたのならば、いろんな向きがあつてもいいはずです。せっかく竪穴住居という半地下式の家に住んでいるわけですから、家の中に埋めたってかまわないでしよう。石をかぶせてもいいでしよう。

問題は、先ほど秋原さんが報告された大福遺跡です。方形周溝墓の入り口とおぼしき所から出ているということですが、本当にそこへ埋めたんでしょうか。私は彼を信頼していますが、一つの例だけでは「本当にあ？」と思つてしま

います。大福遺跡のような例は今のところ特殊例で、そういう例が他にもいくつか重なると、「それはそうだ」ということになつて来るでしょう。

とにかく、埋まりかたや埋まつている土の観察が、「銅鐸をどのようにうめたのか」とか、「埋めたのは一回きりなのか」などといふ銅鐸の性質を決定するでしょう。羽曳野市<sup>はびきの</sup>の西浦銅鐸の場合、なかなか内と外の土の区別がつかなかつたそうです。けれども、銅鐸が埋まつているからには埋めたに違ひない、埋めたのなら穴の線が出るはずです。あとで聞いたんですが、穴の内と外の土の性質はほとんど一緒で、「よくここに線のあるのがわかつたね」と皮肉を言われたそうです。だけど、考古学ではそういうふうに線を引かなければいけないんです。今回は、幸いにして、土の違いが良くわかつたということです。

東南アジアに「銅鼓」という銅の太鼓があつて、おまつりやお葬式の時に取り出して使っていますが、普段は土の中に埋めておきます。おまつりの道具を普段は埋めておくのは世界中のあちこちにあることとして、銅鐸についても普段は埋めていたと私は考えています。埋めていたんだけれど、最終的に銅鐸を使わない社会になつたから、埋めっぱなしになつたという具合に考えていますが、それもまだわかりません。

### \*銅鐸の紋様 その2 應民の紋様と貴族の紋様

銅鐸の用途を考える一つの手掛りに、紋様や絵があります。岡山から出た弥生土器の紋様に、銅鐸の紋様と共通するものがあります。銅鐸の紋様とよく似ているということでは、岡山市津島の弥生土器の高杯ほどよい例はありません。銅鐸も土器と同じ弥生時代に作られた物ですから、同じ紋様で飾られていて当然だと思われるでしょう。ところが、紋様が共通していることが、銅鐸の性格を知る一つの手掛りになるのです。紋様の中には、意味のある紋様や単なる装飾などがあるでしょうが、共通する紋様で飾られた土器を使っている一般の弥生人が銅鐸を見れば、共感を持つというか、ひじょうによくわかるわけです。

ところが、中国の殷や周の時代のおまつりの道具は銅鐸と同じ青銅でできています、「饕餮紋」などのひじょうに奇怪なとてつもない紋様があります。これは貴族社会の紋様で、一般の人々には関係のない紋様です。日本の例として、奈良正倉院の宝物には「宝相華紋」を始めとするいろいろな紋様があります。

あれは社会全体から見ればごく一部の身分の高い人達のための紋様で、当時の一般庶民にはまったく関係がない紋様だったのです。当然のことですが、階級社会が成立すると同時に紋様も独占されるわけです。一般の人々は飾ることな



シカのある銅鐸  
(静岡県津島遺跡)

シカのある銅鐸  
(静岡県津島遺跡)



んてできないのです。飾るとしても、全然違う紋様を使います。

その点、土器と銅鐸の紋様が共通していることは、銅鐸がみんなの物であったということの一つの証拠になると思います。昔から、「お墓に埋められた銅鐸はないことは、銅鐸が特定の人の持ち物でなかつた証拠」と言われていますが、これも銅鐸が村またはいくつかの村の集つた社会の共有物だということの表われです。紋様の共通性もそのことを示しています。

#### \*銅鐸の絵 原始絵画

縄紋時代にも絵がないことはなかつたんですが、縄紋時代の絵はひじょうに点数が少ないので、炭素14年代というのが正しければ、八千年前から一万余年ほど昔から二千五百年ほど昔までが縄紋時代ですけれど、絵はまだ四・五点しかありません。その代わり縄紋時代には、土偶のような立体制的に表現したものが多いためです。弥生時代になると銅鐸や土器に絵が描かれるようになりますが、これは当たり前のことなんです。なぜかと言ふと、縄紋時代の土偶は、立体を立体で、三次元を三次元で表わしていますから、ある意味では簡単なんです。ところが絵というものは、立体を平面に、三次元を二次元に翻訳しなければなり

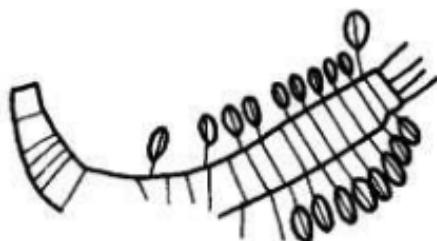
ません。これは難しいこととして、実際にはできないことです。

世界地図は地球儀を展開してありますから、本当はインドはグリンランドの2倍の面積があるのに、地図の上ではグリンランドがインドの2倍に描かれています。立体を平面に置き換えるのは不可能で、ごまかしが必要です。このごましをたくみに利用したのが、みなさんの中にもファンが多いでしょう、ご存じのエッシャーです。エッシャーの「だまし絵」は、高い所から水が流れてくれるかと思うと、その水がまた高い所へ戻るというような絵ですね。あれは平面の世界だから、それをあたかもあるがごとくに描けるんで、いくら彼が天才でも、三次元の世界でそれはできません。

さて、何が言いたいかというと、現在の私達の大多数の絵の書きかたは、一つの点から物を見て描いています。「遠近法」などというものも一つの点からの視点から見て描きます。たとえばオーストラリアの原住民のワニの絵にありますが、頭は横から、胴体は上から、そして尻尾はまた横から見て描きます。ワニには、顔は横から見るのが印象的、胴体は横から見るのが印象的なんですが、これと同じような弥生の絵で、高床倉庫は横から見ていますが、はしごは正面か

ら見ます。羨ましきかぎりです。子供の絵に共通しています。描いている方には矛盾がないわけで、所詮三次元を二次元に置き換えることは不可能なんだから、いくつもの観点から見ようとビカソさんなんかもそういうことをやったわけです。「キューピズム」といいますが…。これが原始絵画の一つの特徴です。

銅鐸の絵や弥生土器の絵にもそういうことはよくあります。一番面白いと思つたものは、奈良県清水風(しづかぜ)という所から出土した土器に描いてあつた船の絵で、船は横から見て描いてあるんですが、両側にオールが出ています。同じようなことは福井県坂井町大石から出土した銅鐸の絵にも言えます。これは、人が一人いまして、そのまわりに櫂が並んでいます。たとえば鹿を描きますと、胴体は横向きを描きます。足は四本描かないと気が済みません。足は横向きでも四本見えることもありますから許せるとして、頭は正面から見たものになります。難しく云うと側面と平面、簡単に言うと一番捉えやすい形で描くわけです。カメ（スフボン）は上から見て描きます。鳥は横から見て描いてしまいます。だから、カメを上から見た絵と、水鳥を横から見た絵を同一画面に描いてします。一つの絵の中に側面と平面を混せてても平気なんですから。それがこの時代の絵の特徴です。



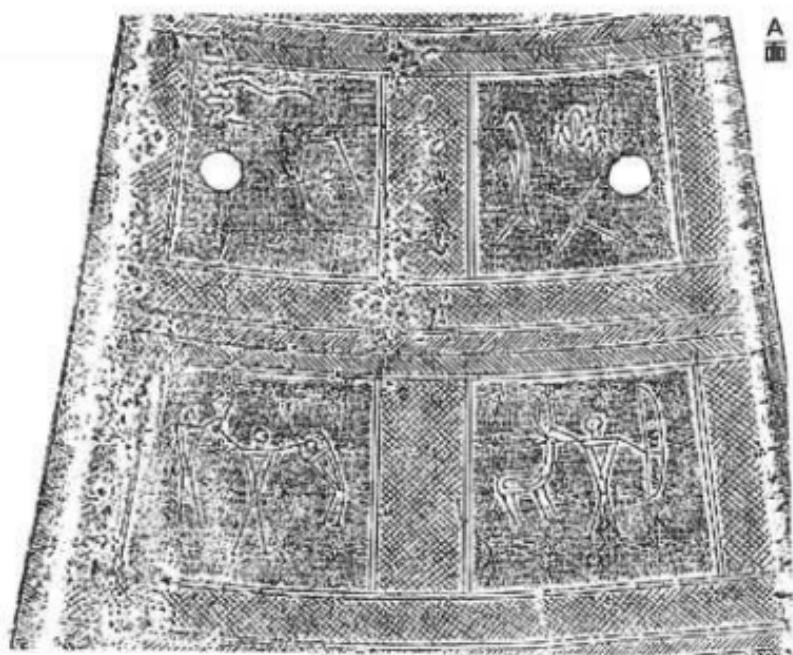
弥生土器に描かれた船の絵  
(奈良県清水風遺跡)

\* 銅鐸の絵 その3 絵の意味するもの

絵の描かれた銅鐸の中で注目すべきものに、神戸市桜ヶ丘の四号銅鐸・五号銅鐸、谷文晁という江戸時代の文人が持っていた銅鐸、香川県から出て来たと言われている銅鐸があります。この四つの銅鐸は、形も紋様も特徴がひじょうに良く似ていて、同じグループの人々が作ったと考えても良いのです。このうち、香川県の銅鐸が六区画で、後は四区画です。すべて表裏に絵があります。ただし谷さんの銅鐸の一方の面の上二つの絵は、発掘された後で壊してしまいました。全部で三四の画面に絵があります。この絵は、同じ技術者が連続的に作つたと考えられます。結果的には、桜ヶ丘五号鐸①→桜ヶ丘四号鐸②→谷さんの銅鐸③→香川県の銅鐸④の順番に作られていますが、それは「あるため」にです。

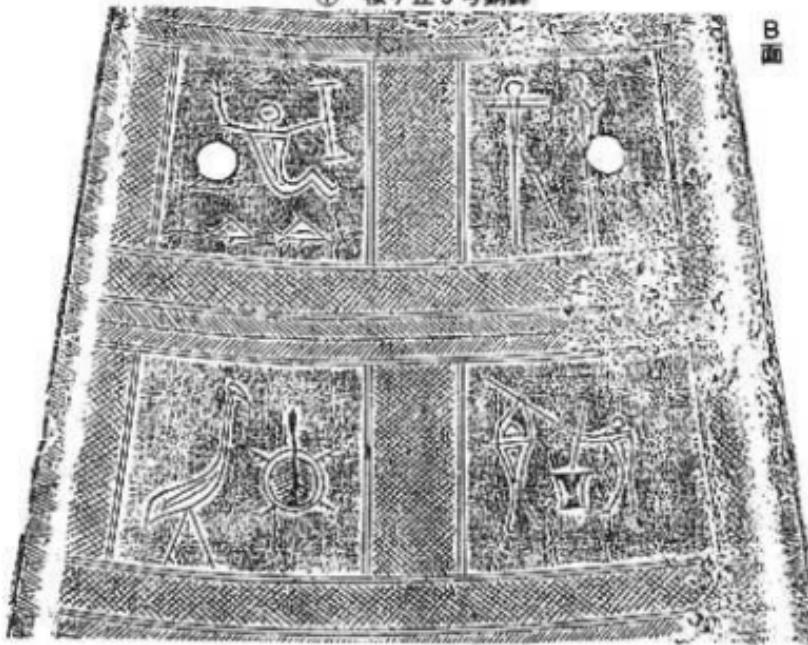
ここにある絵は、全部をまとめて考えることができます。そういう意味でも重要なんです。この絵の中には人が舟を打ち下ろしている絵（①-B・④-B）はお餅をついているんではなくて、稻穂を入れて穂をはずしている脱穀風景です。合計四人が描かれていますが、四人とも三角頭です。狩りや魚捕りを

A面



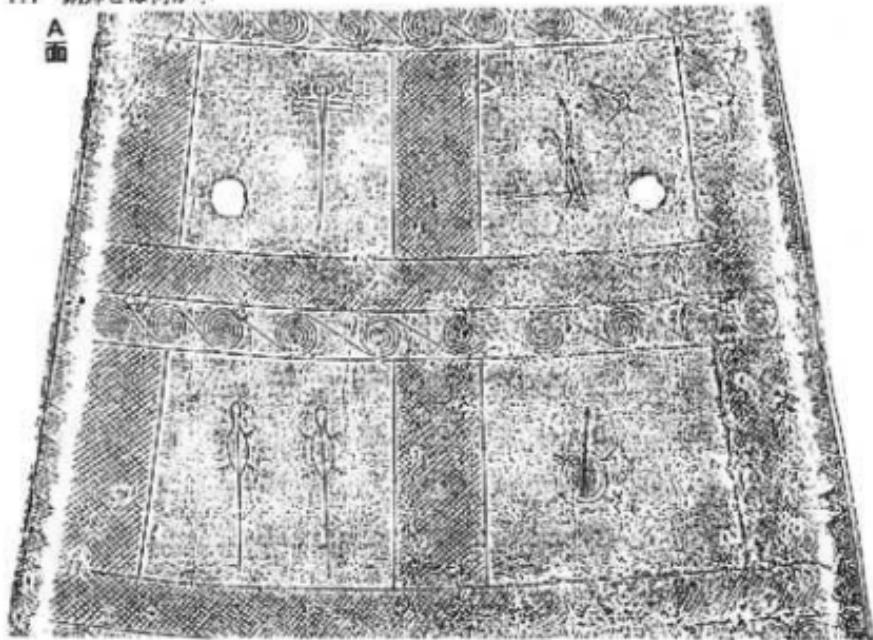
① 桜ヶ丘5号銅鐸

B面



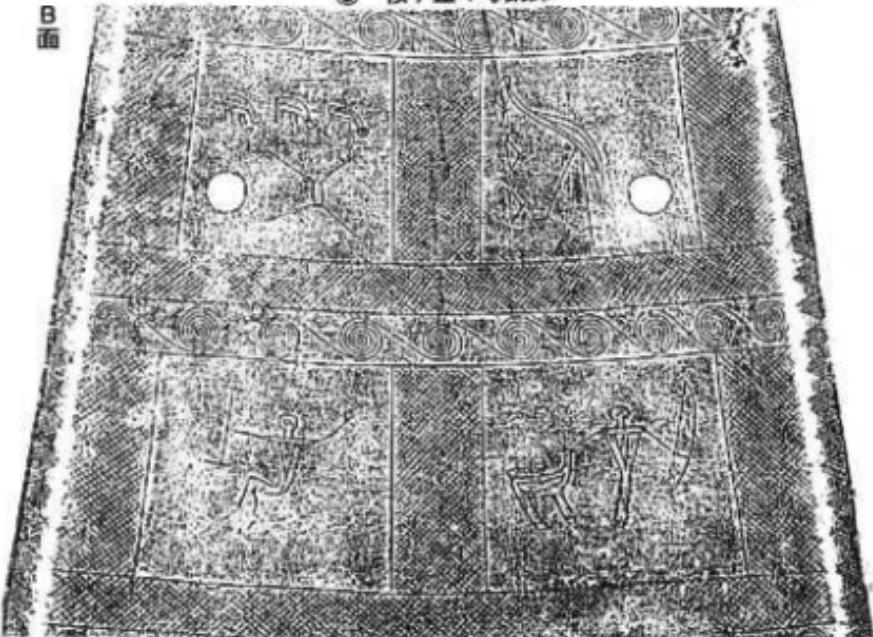
111 銅鏡とは何か？

A  
面



② 桜ヶ丘 4号銅鏡

B  
面

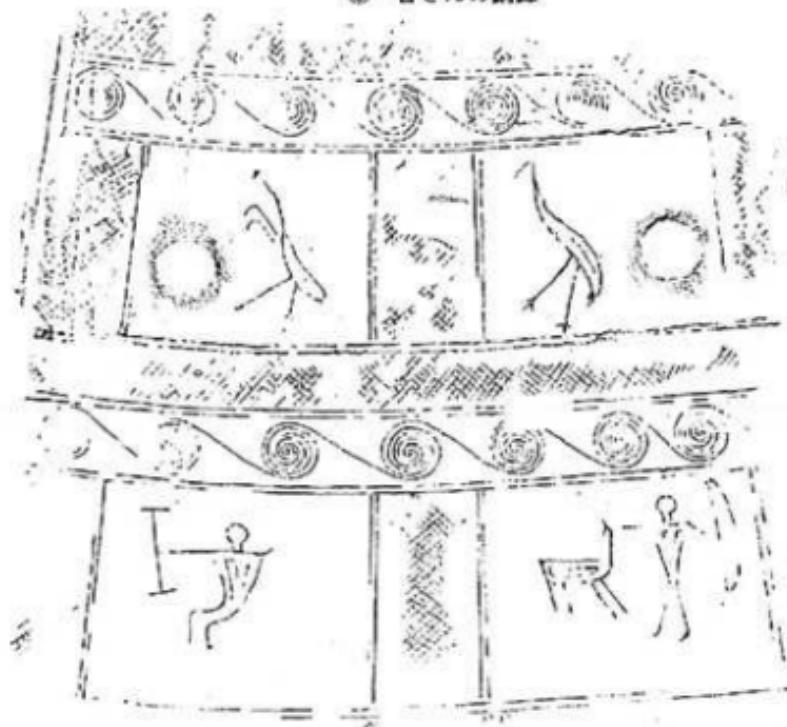


A面（上半欠損）

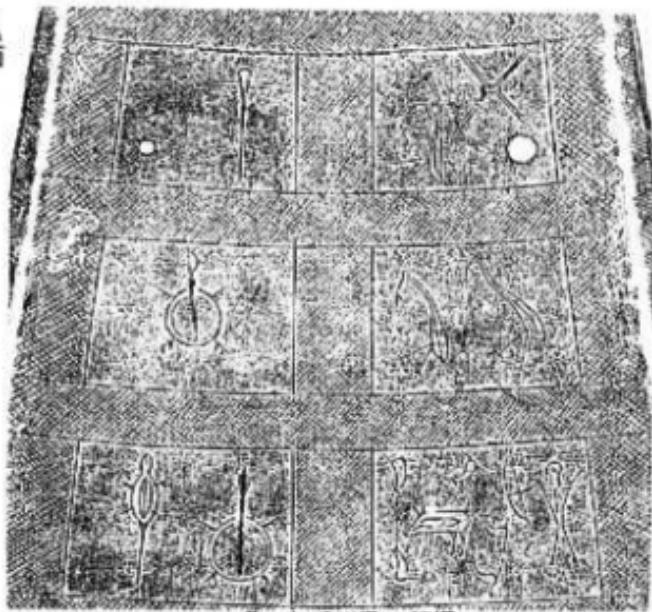


③ 谷さんの銅鏡

B面

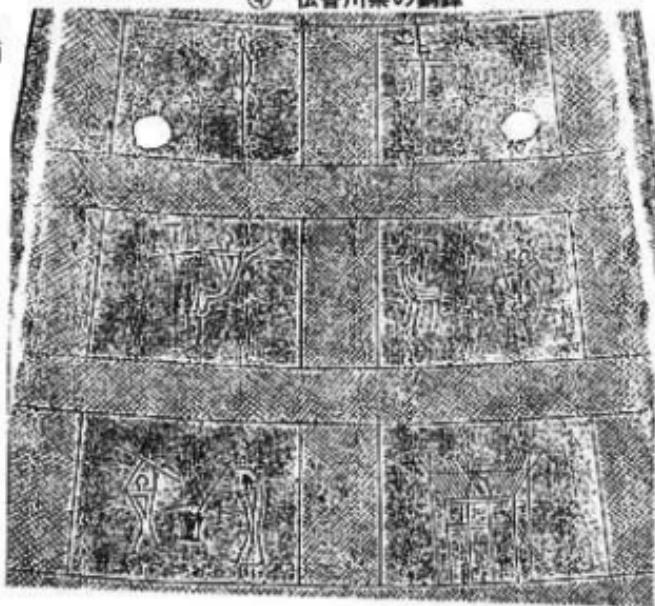


A  
面



④ 伝香川県の銅鐸

B  
面



しているのは丸頭です。民俗例では、脱穀は女の仕事で狩りや魚捕りは男の仕事となっていますから、銅鐸に男女の仕事の分担が描き出されている、ということもあるわけです。

時間的なことがあって詳しい説明はできませんが、私はこの紋様を詳しく、どこの部分に何が描かれているかという「法則」のようなことを調べました。

そうしますと、この四つの銅鐸については、狩りあるいは魚捕りの場面のあとに必ず高床倉庫や脱穀風景などの農業場面が来て終る場合と、農業場面を省略して狩りあるいは魚捕りの場面で終るものとがあることに気がつきました。桜ヶ丘五号銅鐸は狩りと魚捕りの場面があつて、最後は農業場面です。桜ヶ丘四号銅鐸と谷さんの銅鐸は、狩りの場面と魚捕りの場面で終っています。香川の銅鐸は、魚捕りや狩りの場面のあとに農業場面があつて終っています。

小林行雄という先生がおられまして、銅鐸の絵の解釈として「四つの銅鐸には自分より弱いものを食べる肉食動物が出て来る」と言っておられます。ツルカサギがお魚を食わえています。カメもお魚を食わえています。カマキリやトンボがいますが、チヨウ・セミ・マツムシ・スズムシはいません。自分より弱いものを食べるものが出て来ます。そして、人間も狩りの姿や魚捕りの姿で出

て来て、弱肉強食の世界が描かれています。小林先生は、「人間も狩りによつて生きて来たけれど、神様にお米を作ることを教えられて今ではそれで暮らしているということを表現している」と言われたんです。

私はなんとか違う説を立てようと思いまして、いろんな表われかたの法則を見たんですが、結果としては否定することはできませんでした。小林先生の論文集に先生と違う説を書こうとしたのが、師の影を踏もうとしたことになつてバチが当たつたのかもしれません……。いずれにしても、小林説を破ることはできませんでした。やはり、銅鐸の絵が農業に関わっているということについては、否定できません。

そのほかには、水鳥や鹿が出てきます。鹿には角がありませんから、私は雌の鹿だと考えました。弥生土器に描いてある鹿の大多数には、角があります。女が作った土器には雄の鹿が、男が作った銅鐸には雌の鹿が描いてあるということになります。これに対して、春成秀樹さんは、雌鹿ではなくて角が落ちたあとで雄鹿だと言っています。奈良では一月に角切りをやりますが、切らなければ一月か三月ころに角が落ちるんです。だけど、角のない鹿を角が落ちた雄鹿とみるのは誤りです。なぜかというと、証拠は一つあります。

桜ヶ丘四号銅鐸のよう、銅鐸の方に鹿がたくさん並んでいるものがあります。その中にバンビがいます。鹿の子供は雌と一緒にいるもので、雄と一緒にはいません。もっと決定的な証拠は、つい最近東京国立博物館の井上章さんという若い銅鐸研究者が見つけた面白いものなんですが、三重県の磯山という所の銅鐸にあります。今までその銅鐸にいた猪は二匹だったんですけど、急に増えまして七匹になっちゃったんです。銅鐸の裾に鹿が六匹いて、猪五匹と対決しているんです。一番前のやつは角を持っています。あの五匹は角がなくて雌です。そうすると、やっぱり角のあるのが雄、角のないのが雌に描き分けているのでしょうか。

脱線しますが、今ここに描いた鹿の絵は一番前のが丁寧に描けました。これは銅鐸を見る時にも役立つこととして、例えば原稿用紙の一枚目と五枚目とでは一枚目の方を丁寧に書きますね。銅鐸にもそれは見られます。つまり、一方の面が線の数や紋様など何も彼も整っていて、もう一方の面では線の数が減ったりするようなことがあります。もしかすると、今回の銅鐸についてもそれが言えるかもしれません。鋸歯紋に限れば、吊り手の部分はA面が一五個なのにはB面は一四個とか、鷲の部分はA面では飾耳と飾耳の間に入れた鋸歯紋の数



磯山銅鐸に描かれた鹿と猪の対決

が四個一組なのにB面では二個一組だとか、鋸歯紋に加える線がA面は七本なのにB面は六本だとかいうふうに、丁寧な作りはA面に集中しています。気持ちはわかりますよね、同じものをもう一つ作らなければいけないわけなんですから。手を抜くというのは、大昔からあつたんですね。

さて、銅鐸には猪や鹿がいますが、記紀や風土記にみえる古代の説話には、例えば、鹿を捕まえて水田を荒らさないよう気に警わせるというようなこともあります、鹿と農業は関係があります。鳥にしても、神様のお使いであつたり、魂を運搬したりするというようなこともありましたから、動物が出て来るからと言つて狩りに關係するとは言えません。かなり以前に、岡山の鎌木義昌さんは「古い銅鐸には狩りの場面が多く、新しくなると農業の場面になる」と言われましたが、これは誤りです。古くから農業の場面もあるし、狩りの場面もあります。そして、どうやら、農業場面の絵の方から、銅鐸と農業の関わりを類推しても良さそうです。

#### \*銅鐸の用途と消えたわけ

弥生時代は、稻作が始まった時代です。大切な農業技術が伝わって来ました。

天気予報もなかつた時代のことですから、技術とともに大切なのは、「農業の神様」です。弥生時代になると、基本的に縄紋時代の信仰が消え去ります。ごく少数残つているものもありますが、土偶は消え去つてしまい、石棒という石器やその他いろいろの縄紋時代を特徴づけていたものが、消えてしまいます。石棒と繩紋土器を特徴づける「波状口縁」という波打つてある口も消えます。私はあれをおまつりの土器と思つてゐるんですが、縄紋的な信仰、宗教より一步手前の呪いや呪術が、弥生的なものに置き換わつていくわけです。農耕社会にとって一番大切なものは、「豊作をもたらしてくれる神様」です。だから銅鐸の用途として、稻作に関わる農耕のおまつりほどふさわしいものはないと考えます。

かつて、三品彰英という民俗学の先生は、「地の神・土の神が大切だった時代から、日の神・天の時代に変わる」と言われました。銅鐸は「地の神・土の神である」と。これが「日の神の時代になつたから、銅鐸が消えるんだ」と、そして、鏡が現われて「天の神が奉られるようになる」と。それも一つの解釈です。私には、「銅鐸がなぜ消えたか」かという最大の理由はよくわかるんです。それは、古墳の出現を考えればいいのです。古墳というのは、一人が死ぬ

と、その人のために丘を築いてお墓にするわけです。みんなの中の一人ではなくて、みんなから隔離して突出した人が現れるのです。その人にとつては、自分がいかに偉いか、あるいは自分の家柄がいかに山繩正しかと、自分を権威づける、自分を守る神様が大切なんです。そうすると、みんなのおまつりの道具は、じやまになつて来ます。だから、個人というものがひじょうに突出して来る時代になりますと、共同のおまつりというものが不要になります。これが銅鐸の消えた最大の理由だということは、確かだと思います。

古墳時代には「直弧紋」と呼ばれる紋様がありますが、これなどは、身分のある人が独占した紋様でしょう。そういうものが出来始めます。弥生時代の終わりから古墳時代の初めにかけて、だんだんと身分の高い人が出て来て、その人は普通の人とは違う人になってしまいます。良く知られているように、北部九州ではたくさんの中国の鏡や朝鮮半島からの青銅製の武器などをお墓に入れています。ただ、面白いのは、それが入っているのも一般的な埋葬方法である斂棺だということです。考えようによれば、「みんなの中の一人」という意識の表われかもしれません。本当にみんなと違う人であれば、棺から変えないと不可以ないです。身分の高い人が出て来ると、それは決定的になります。天皇

家などがその良い例です。天皇は自らのことを朕とおもいます。自分の呼び名、自分の家の形、衣装から何から何まで全部違うというのは、差をつけて自分の偉さを示すためでしよう？ そういう世の中、そういう時代になつていったことによつて、銅鐸は消えざるを得ない状況になつていつたわけです。また一方では、銅鐸がこれ以上は作れないという「頑点」まで達していたことも事実です。

#### \* さいごに

だいたい時間が来てしまいましたが、「銅鐸がいかにわからないものか」ということがおわかりになつたかと思います。

銅鐸については、たくさん意見がありますが、その中でとても面白いと思うのは、春成秀爾さんの説です。いろんな民俗例にもありますが、「自分達の領域に悪いものや悪い神が入つて来ないよう、いろんなものを埋めておまつりをする」と彼は銅鐸についてもそれを考えました。つまり、畿内の東の入口として滋賀県野洲の小篠原を考えて、西の入口として神戸の桜ヶ丘を考えて、南の入口として和歌山で群集してたくさん見つかる銅鐸というものを考えたんです。そういうことを始めとしていろんな考え方がありますが、ここではあまり

いろんな考え方を紹介しない方がいいでしょう。時間がかかりすぎでしまいます。

「銅鐸とは何か？」―― わかりません。

銅鐸とは不思議なもので、「まったくわかつていらないんだ」ということをわかつていただければ、ありがたいと思います。その点、今回の銅鐸は、「埋め方について重要な事実が認識された」ということを繰り返しておきましょう。

ご静聴ありがとうございました。

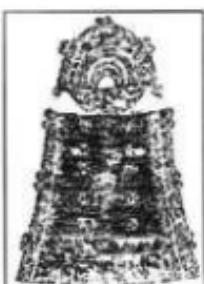
あとがき

月日のたつのは早いもので、平成元年一〇月二四日に跡部遺跡から銅鐸が出土してから、そろそろ一年になろうとしています。

調査中はもとより、調査終了後も多くの方々のご助言やご協力、叱咤激励を賜りながら今日に至っておりますが、このほどようやくこのような小冊子をまとめることができました。サブタイトルにもありますように、弥生時代最大の謎と言われている「銅鐸の謎」にせまり、古代のロマンにひたつていただければ幸い存じます。

最後になりましたが、本書作成にあたって、講師の先生方からは、資料提供のほか多大なご協力を賜りました。お忙しい中にもかかわりませず、まことにありがとうございました。厚くお礼申し上げます。ここに記して感謝の意に代えさせていただきます。

平成二年九月



(財)八尾市文化財調査研究会報告27

## 銅鐸講演会記録集

発行 平成2年9月

編集 (財)八尾市文化財調査研究会

印刷 近畿印刷センター

